

Title	唯物論的歴史觀の哲學的諸前提
Sub Title	
Author	Benno, Erdmann(Goto, Junzo) 後藤, 純三
Publisher	三田哲學會
Publication year	1930
Jtitle	哲學 No.7 (1930. 12) ,p.161- 230
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000007-0161

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

唯物論的歴史觀の哲學的諸前提

原著者 ベンノー・エルドマン
譯者 後藤純三

内 容 目 次

- (一) エンゲルスの定義
- (二) 哲學的前提
 - A 形而上學的模寫說
 - B 形而上學的唯物論
 - C 心理學的經驗論
- (三) 推斷
 - A 唯物論よりの
- (四) 辨證法
 - B 經驗論よりの
- (五) 特質
 - A 宗教的
 - B 倫理的
 - C 未來の社會
- (六) 約論

譯者はしがき

左に掲ぐる論文は

Jahrbuch für Gesetzgebung, Verwaltung und Volkswirtschaft im deutschen Reich. Einunddreissigster Jahrgang, herausgegeben von Gustav Schmoller, Leipzig, Verlag von Duncker & Humboldt. 1907. S. 474—919. *古今東西の法律*
Die Philosophischen Voraussetzungen der materialistischen Geschichtsauffassung. von Benno Erdmann.

の傍註を除ける全譯である。

本論文の科學的價値は、あまりに有名である。唯だ、譯者は、本論文がその拙譯——全く字義通りの拙譯——を敢てしてまでも一般に讀まれる事を希ふ程の出色の文字であることを記するのみである。譯者は此れと同時に専ら、その拙譯によつ

て、原文の價値が幾らかでも殺がれる事を、心配する。乞御叱正。

最後に拙譯の發表に對して好機會を與へられた川合貞一先生、及び譯出に際して、その直接の動機と必要なる指摘補助とを惜まなかつた畏友平井新教授に對して此處に最上級の感謝の意を表し度す。
一九三〇・五・九

(一) エンゲルスの定義

吾々は十九世紀の特徴を擧げて、自然科學、殊に自然科學的技術全盛の時代となすのが普通である。だが此の場合に於いてもまた、歴史的記憶は事實に忠實で

はない。十八世紀の終から十九世紀の初にかけては、斯る特徴の表現は吾國では適用せられる事は出来な。此の時代と關係があり、又此の時代に適はしいのは、「詩人及び思索家の國民」といふ言葉であつて、吾々は此の言葉の中にフランス及びイギリス側よりの眞面目な意味の評價を略述するのが普通である。此の當時ドイツに於ては、科學的、精神的勞働は、精神科學的研究、殊に啓蒙哲學に對する反動として現はれたる歴史的研究を更に深める事に集中せられてゐた。かの世紀に於ける吾國の精神生活の特徴を示す記號である吾々に思はれてゐるのは當然であるところのヘーゲルの哲學は、歴史的動機によつて嚮導せられ新しい歴史的研究の精神によつて満たされたる一形而上學的思索である。自然科學の流行を來たしたのは、吾國に於いては、漸く十九世紀の三十年代であつて、この流行は愈々益々、精神科學的研究の着眼點に對する、殊に思辨哲學に對する反動を形作つてゐる。蓋し、思辨

唯物論的歴史觀の哲學的諸前提

哲學は、それが歴史的思惟の精神を採用することの多ければ多い程、それ程遙かに、自然を説明するに當つて、自然科學的思惟から遠ざかつたが故である。

此等の反動的諸思潮の一派、當然重要となるに至つたに拘らず哲學的に充分なる注意を拂はれなかつた一派、即ちマルクス及びエンゲルスの「唯物論的歴史觀」が此の論文の命題である。本論文の任務は唯物的歴史觀の豊富なる經濟的實質及び此の實質の歴史的歸結に關する特質を擧げようとするのではない。余は寧ろ唯物論的歴史觀の創始者の説明に従へば唯物論的歴史觀の基礎をなしてゐると云ふ、その哲學的諸前提を示し、而して、さうする事によつて、唯物論的歴史觀を批判的に現代哲學發展の連鎖の中に排列せんと企てるのである。余は、此と同じ目的を有する、余の知れる從來の諸研究を研討参照する事を、全然論外に置いた。余は斯かる研討はこの際效果なきものと思ふ。

「唯物論的歴史觀」と云ふ言葉は、周知の如く、新し

い歴史を有するものであつて、元來標語として作られたものではないとは云へ、此の言葉は墮して標語となつても差支ない位古いものである。

吾々は此の言葉を此處では單に、それが後程明かになるが如く、マルクス及エンゲルスによつて用ひられたる場合の意義にのみ解釋する、即ち此の言葉のみが、それが簡單に云ひ表してゐるところの思想に適合せる言葉である場合の意義にのみ解釋する。

豫めの注意すべきは、言葉と云ふものは、何時もさうであるやうに、それが表してゐる思想そのものよりも新しいものであると云ふ事である。此の事が、ドイツ社會民主黨一般の、時間的及び實質的に最初の理論家であるマルクス及びエンゲルスによつて、先づ最初にその青春の暴風雨時代に着手せられ、續いて十九世紀の四十年代に於いて完成せられたる、歴史的發展の解釋に對する基礎である。強大にして且つ急速に膨脹せる一社會民主的政黨が吾が故郷に出現するに至るま

で、即ち前世紀の六十年代に至るまでは、此の人類の歴史的發展の本質に關する假説は殆んど無視せられてゐた。これに對する有力なる證據は、フリードリツヒ・アルベルト・ランゲの有名なる唯物論史の第二版（一八七五年）の中に於ても未だ此學說に就いて何事も作られてはゐないと云ふ事である。

出發點の用をなすべき命名は、云ふまでもなく、フリードリツヒ・エンゲルスのチューリングに對する辛嚴なる辯駁書中に初めて現れ、本書の最古版は一八七八年に出版せられた。此の辯駁書の中には次の如き屢々引用せらるゝ言葉がある。

「新しき事實は」——此の事實に關しては後程言及する事にする——「一切の從來の歴史を新しき研究に従はしむる事を餘儀なくせしめた。斯くて、有らゆる從來の歴史は階級闘争の歴史であり、此等の相互に相闘ふ社會の諸階級は常に生産並に交換關係、一言にして之を云へば、その時代の經濟的關係の所産であるといふ

こと、それ故に、その度毎の社會の經濟的構造が現實の基礎であり、各個の歴史的時期の法律的及政治的秩序並に宗教的、哲學的及びその他の觀念方法の全上層建築は結局に於いて此の基礎から説明せられねばならないといふ事が明らかとなつた、此處に於いてか觀念論はその最後の避難所たる歴史觀から驅逐せられ、一の唯物論的歴史觀が現れた、斯くして、從來の如く人間の實在をその意識より説明するのではなく、人間の意識をその實在より説明するの道が見出された。」

歴史觀の唯物論はこゝに直接云ひ表されてはゐない。寧ろ先づ第一に問題となつてゐるのは、「社會の經濟的構造」、即ち「生産及交換關係の」その時代時代の状態が、歴史的発展がその中に於いて行はるゝところの、「階級闘争の現實の基礎」であり、且つ宗教的、藝術及科學的たると、法律的或は政治的たるとを問はず、吾々人類の一切の發展の基礎であると云ふ意味に於ける一の經濟的歴史觀である。

唯物論的歴史觀の此の經濟的特質がもつと明かに現れてゐるのは、エンゲルスがある他の個所に於いてなしたもう一つの説明の中に於いてとあり、此の説明の序言は普通此の歴史解釋の嚴密なる定義として擧げられてゐる。

「歴史の唯物論的見解は生産、及び生産に次いで其生産物の交換が一切の社會秩序の基礎であると云ふ命題に出發する、即ち各個の歴史的に現るゝ社會に於いては、生産物の分配、及びそれと共に階級或は身分に分たれたる社會組織は、何が如何にして生産せられ、如何にしてその生産物が交換せらるゝかと云ふ事によつて左右せらるゝと云ふ命題に出發する。此れによれば、一切の社會的變化及び政治的革命の窮極の原因は、これを人間の頭腦の中に、即ち永久の眞理又は正義に對する人間の増進し行く洞察の中に求むべきではなくして、生産及交換方法の變化の中に、求むべきである、そは哲學の中に求むべきにあらずして當該時代

に於ける經濟の中に求むべきである。現存の社會的制
 度は不合理であり、不公平である、理性は無意義と、
 善行は苦痛と轉ぜりと云ふ目醒め(註)行く洞察は、生
 産方法及交換形式中に極めて靜かに變革が行はれ、從
 來の經濟的條件に調和せる社會秩序は最早その變革に
 適合しないと云ふ事の兆候にすぎない。この事はまた
 同時に、見出されたる弊害を除去するの手段は、同
 様に、變化せる生産組織自身中に——發展の程度が多
 少に拘らず——存在してゐねばならぬといふ事を語つ
 てゐる。此の手段は云はゞ頭腦などと云ふ如きものか
 ら發見せられる事の出来るものではなくして、頭腦の
 力をかりて、生産の現存せる物質的事實の中に見出さ
 るべきものである。」

由之觀之、唯物論的歴史觀の特殊なる内容は、疑ひ
 もなく、歴史的發展の經濟的諸要素に負ふところの機
 能に基づいてゐる。此等の要素の總計はマルクス及び
 エンゲルスにとつては、謂はゞ人類がその歴史の中に

於いて體驗する一切の變革に對する獨立せる可變性を
 形成するのである。

それにしても、エンゲルスが彼によつてもまた代表
 せられたる歴史觀を一の唯物論的歴史觀と稱したのは
 全く當を得たものであつた。唯物論的歴史觀が唯物論
 的であると云はるゝ所以は、その基礎をなすところの
 實在の成立に關する前提と、唯物論的歴史觀の創始者
 の見解に従へば經濟的理論を此の前提と結び付けると
 ころの内的關聯との爲である。

註、エルドマンの原文では erwachende となつてゐる
 が、これは明かに erwachende の誤植であらう。故
 に、譯者は、此を Engels, Anti-Dühring, II, Aufl.
 1921, S. 286. に従つて訂正した——譯者註。

(二) 哲學的前提

A 形而上學的模寫說

若し吾々が唯物論的前提と、此の前提の經濟的理論との關係を明にしようと欲するならば、吾々は、豫め、マルクス及びエンゲルスの思索行程の基礎に横たはるもう一つの普遍的假定を釋明せねばならない。

唯物論的歴史觀は、最初に引用せられたるエンゲルスの言葉の中に於いて、「觀念論的」歴史觀に對立せしめられてゐる。此の觀念論的歴史觀の主要代表者は、社會民主主義的理論家に於いては、ヘーゲルであつて、その學説は、二世紀以上を貫いて、即ち略々一八四〇年頃に至るまで、ドイツに於ける精神界に未曾有の勢力を及ぼし、マルクスも、さうして更に彼の仲間エンゲルスも、ヘーゲル學説を通過した事があるのである。エンゲルスはヘーゲルを——特色ある方法で、

サンシモンと並べて——「當時に於ける最も萬能な思想家」と呼んだ。「ヘーゲルは」、とエンゲルスは批判する、「觀念論者であつた」と、と云ふ意味は、エンゲルスの此の言葉に對する註釋に従へば、「ヘーゲルにとつては彼の頭の中の思想は現實の事物及經過の、多かれ少かれ抽象的な映像ではなくして、その反對に、事物及びその發展は何處とも知らず既に世界以前に存在してゐるところのイデーの、現實化されたる映像に過ぎなかつた」と云ふことである。

吾々は、此處にヘーゲルの觀念論的哲學と對立せしめられてゐるところのもの、即ち吾人の「思想は現實の事物及び經過の多かれ少かれ抽象的な映像」であると云ふ主張に注意する。此れは決して偶然の、重要ならざる轉向ではない。この思想は寧ろエンゲルスに於いても、マルクスに於いても、此の意味で屢々繰返されてゐる。

吾々が簡單に模寫說と呼ばんと欲するこの模寫說は

唯物論的歴史觀に最初の根本的な哲學的、前提を與へてゐる。

此の模寫說中に於いて先づ第一に問題であるのは哲學的、前提である。蓋し、一切の個別研究に對して等しく基礎をなし、それ故に、歴史的研究をも共に制約するところの、現實に關する諸前提、を詳細に吟味し、斯くして普遍妥當なる諸概念を作りあげると云ふ事は、常に哲學の本質的な任務であつたし、又將來も常に依然として哲學に對する一つの本質的な任務であるであらうが故である。だから模寫說の中には哲學的前提が存在してゐる、即ち夫れはマルクス及びエンゲルスには非常に直接明瞭に見えたところの一つの假定である、であるから、此の假定は彼等によつて屢々種々様々に變化せしめられてゐるにも拘らず、彼等は此の假定を何の個所に於いても嚴密なる研究の價值あるものとは思はなかつたのである。

吾々はこの事を、吾々が此の前提は如何なる精神か

ら生じて來たかと云ふ事に注意すれば、了解する事が出来る。社會民主主義の理論家たちが此の假定を先づ最初に説明したのではない。此の假定は、謂はゞ、それが屬せし時代の大氣の中に存在してゐる。

先づ第一にこの事は、ヘーゲル學派のもう一つの背信的分派の學說、即ちルードヴィヒ・フォイエルバッハに表れてゐる。

マルクスはフォイエルバッハを成程「ヘーゲルに比すれば全く貧弱」であるとは云つてゐるが、然しながら、マルクスは彼を同時に「ヘーゲル以後劃時代的」だと云つてゐる。エンゲルスは、マルクスと彼とによつて著されたブルノー・パウエルに對する反駁書、即ち一八四五年の「神聖家族」の中に於いて既に、フォイエルバッハを、ヘーゲル學派の祕密を暴露したところの、その人として賞讃してゐる。「キリスト教の本質」に關するフォイエルバッハの著書に就いては、彼は彼の其の以後に於ける辯明的論文中に於いて次の様

に批判してゐる、即ち「この書の解放的效力を心の中に描く爲めには、これを親しく體驗した事がなければならぬ。世は擧げて此れに感動した。吾々は皆、一瞬時、フオイエルバツハ派であつた」と。ルードヴィツヒ・フオイエルバツハは、その著「キリスト教の本質」の序文中で、彼の思索及び敘述方法に於いて同一の模寫說に左袒して云つてゐる、即ち、「余は絶對的思索、非物質的思索、自分自身に満足してゐる思索——思索の材料を自分自身から汲み取るところの思索には總じて絶對的に反對である。余は眼を頭から引きちぎれば、それ程よく考へ得ると思つて、眼を頭から引き抜く哲學者達とは天地ほど違つてゐる。余は思惟する爲には諸感官、就中、眼が必要だ、余は余の思想を、吾々が常に感官活動の助けをかりてのみ己がものとなし得るところの物質の上に基礎づける、余は對象を思想からではなく、反對に對象から思想を作る、だが對象なるものは頭の外に存在するものゝみである」

唯物論的歴史觀の哲學的諸前提

と。「ヘーゲルは」、と彼は他の個所に於いてより明確に説いてゐる、「世界を組み立てるところの、一つの論旨の上に立つてゐるが、余は世界を實在するとして前提し、それを實在するとして認識せんと欲する、一つの論旨の上に立つてゐる、即ち彼は下り、余は昇る。ヘーゲルは人間を逆立ちせしめ、余は人間を、その地質學(一)を土臺とせる兩足の上に据ゑる」と。斯くてフオイエルバツハは概括的に宣言する、「哲學は、在るところのものゝ認識である。事物及び實在を」——即ち余が頭の外にある事物及實在を——「それが在るがままに認識する——それが哲學である」と。

然しながら、若しもフオイエルバツハ、エンゲルス及びマルクスが、彼等自身とヘーゲルとの間の一つの決定的相異點、及び其れに適應して、古くからある、當時新に反動として現れて來たところの形而上學に對する一つの決定的相異點を、此の模寫說の假定の中に見出すとすれば、彼等は、近距離の爲めに眼がくら

み、皆同じ程度に誤つてゐる。歴史的唯物論の或る最近の敘述者は、彼が此の模寫説の發端をライプニッツに歸する以上、これまた全く同様に誤れるものである。模寫説の思想は寧ろ歐洲の形而上學と等しく古きものである。此の思想は十八世紀の中葉に至るまで歐洲の形而上學の自明なる前提をなしてゐる。此の前提の意識的確信的、再採用はまたカント以後の思辨的形而上學、殊にヘーゲルの形而上學の、花押である。

蓋し、こゝに取扱はれてゐる模寫説は、實在を全く同一に、謂はゞ餘すところなく、自己の中に寫取すると云ふ事、即ち、眞理を、古い定義に従つて云へば、眞に在る或は現實なる對象との合致の中に求めると云ふ事は、成程吾々の感覺には許されてはゐないが、それでも確に吾人の思惟には賦與されてあると云ふ、自明であるが如く見えるが故に元來吟味せられてはゐないところの假定に、其の本質を有してゐるが故である。此の假定は、本來の意味に於ける一の形而上學的

前提である。蓋し、アリストテレスより十八世紀の中頃までは「最初の哲學」、即ち後代の所謂形而上學は、「實在そのものに關する科學」と見做されてゐたが故である。如何にして吾人は、實在を、斯る吟味せられざる前提に出發して、決定するかと云ふ事は、此の前提自身とは何等の關係もない。吾人は、それを、古代の概念哲學の如く、イデーの總計として事物の彼岸に、或は事物の中に、思惟する事も、或は、後期の宗教的に基礎づけられたる形而上學と共に、此のイデーの起原地を神の精神の中に求むる事も出来る。吾人は、それをまた、ライプニッツの如く、無限に小さい實體の無限なる多様性として解することも、或は、スピノーザの如く、所産的自然竝に能産的自然であるところの、即ち、現實の、それが多様性に於ける、竝にそれが實體的單一性に於ける總計であるところの、一つの無限なる實體として解する事も出来る。だが何れにせよ結局は、眞なる思惟によつて把握せられたるイデー

は現實の客體と同一である、即ち其の客體の模寫であると云ふ前提は常に依然として保たれてゐる。

歐洲哲學に於ける、此の前提の古くから傳へられ、エレア派及びヘラクレイトスと共に入り込んで來た自明性は、形而上學の此の一見堅固なるが如き基礎が十八世紀の中頃ヒューム及びカントを経て一の基本的問題となつて以來、勿論なくなつてしまつた。何故なれば、此等二人の偉大なる十八世紀の哲學者をして古き形而上學に、彼等の云ふところに據れば、一の新しき形而上學を對立せしめ、或は、吾人の言を以てすれば、クリステイアン・ヴォルフに至るまで（實體論に於いて）固持せられたるアリストテレス流の定義に従つて云ふならば、實在そのものとしての實在に關する古き科學を、原則に於いて、認識論に、即ち、如何にして現實は吾人の認識の條件及び限界に従つて吾人の思惟にとつて把握せられ得るかと云ふ、現實に就いての科學に改造するところの原則的進歩の本質は正に此

處に存するが故である。然しながら、それはカント以後に於ける形而上學的反動によつて意識的に固持せられてゐる、即ちスコットランドの哲學に於いては Common sense を主張する事によつて、獨逸の思索に於いては、吾人をして眞に存在するものゝ内的本質を、直接且つ嚴格なる必然性を以て、確認せしむべき、非感覺的、知的直觀の假定を通して。こは、フイヒテ、シエリング、ヘーゲルに於いて然りである、然り、シヨープンハウエルに於いてすら、假令、美學的轉向に於いてとあるとしても、同様に。蓋し、吾人の知的直觀の中で把握するところの眞に在るものを、ヘーゲルと共に絶對的自我として、シエリングと共に絶對的同一性として、ヘーゲルと共に絶對的精神として、或はシヨープンハウエルと共に絶對的、意識なき意志として考へるか否かは、またもや此處に何等の關係をも有してはゐないが故である。

かゝる實狀が認められてゐると云ふ事は、最初に引

用せられたるエンゲルスの言葉よりして、既に讀取られる。若しも、「事物とその發展とが單に何處か既に世界以前に存在するイデーの現實化せられたる映像として、恰もそれ等が單に、吾々の外にある空間の中に於ける「現實の事物及び經過の多かれ少かれ抽象的な映像」だと思はれるかの如くに、認められるものとすれば、吾人のイデーは矢張り依然として事物の映像に過ぎない！「イデー」と云ふ言葉をカント以前の語法の意味に解せしむるところの、エンゲルスの言葉使用によればヘーゲルに於いては、イデーとは單に、眞に在る絶對的精神の論理的構造の映像にすぎず、此れに反し、フオイエルバツハ、マルクス及びエンゲルスに於いては、唯物論一般に於けるが如く、單に眞に存在するところの運動せしめられたるのみの物質の映像にすぎない。

此の二組は、同一なる事を云つてゐると雖も、さればとて勿論、同一なる事を云つてゐるのではない。マ

ルクス及びエンゲルスは、フオイエルバツハと同様に、知的直觀なるものゝ假定を非難する。然しながら、經驗論と共に、有らゆる吾人の認識の起源が經驗から得られ、しかしてその妥當性が單に經驗の範圍に對してのみ固持せらるゝのに、彼等は知的直觀の代りに或る他の職能上同意義なるものを置かうとも、或は、かの模寫説が保有してゐる吾人の思惟の批判的限界決定がなくてもすむと云ふこと及び如何にして、それがなくてもすむかと云ふ事を證明しようとは試みない。だから彼等は、非批判的なカント以前の形而上學の墻圍中に停滯してゐるのである。夫れ故、吾々は、彼等の方法を此の點に關して一の獨斷論的なるものと云ふまいとしても云はざるを得ないのである。己れを縛る鎖を嘲笑する者は、それ故精神的方面に於いても亦、自由ならざる事久しきものである。

それとも吾々は、エンゲルスがフオイエルバツハに關する論文中に於いて説明するところのものを、眞面

目にヒューム及びカントの學說の一つの認識論的辯駁と見做すべきであるのか？ 彼處では次の如く云はれてゐる、「思惟と實在との關係に關する問題は、然しながら、吾々を取り圍むところの世界に關する吾々の思想は、此の世界自身に對して如何なる關係をもつてゐるのであるか？ と云ふ尙もう一つの別な方面をもつてゐる。吾人の思惟は現實の世界を認識する事が出来るのであるか、吾人は現實の世界に關する吾人の表象及び概念の中に、現實の正しき映像を作り出す事を得るのであるか？」と。吾人は、ヘーゲルにあつては此の問題の肯定は自ら明であると云ふ事を知つてゐる、假令單に、エンゲルスがヘーゲル哲學に於ける知的直觀の職能を顧慮する事なく批判するところに據れば、循環證明に基づいてゐるとしても。「その他」と吾々はその先を讀む、「然しながら尙ほ、世界の認識又は少くとも餘すところなき認識の可能性に反對する他の哲學者達の一例がある。彼等に屬するのは新しい

者の中ではヒューム及びカントである。」だが「此の見解の反駁にとつて決定的な事は、それが觀念論的立場から可能であつた丈は、既にヘーゲルによつて云はれてゐる」と。然らば何を、と吾々は問はねばならない、唯物論は自ら進んで、反駁の爲めに貢獻すべきであるのか？ エンゲルスは答へて云ふ、「フオイエルバツハは唯物論的なるものを附け加へたがそれは、深刻と云ふよりも寧ろ機智に富めるものである。有らゆる他の哲學的妄想と同じく、此の妄想の最も的確なる反駁は——私は逐字的に引用してゐる——「實地、即ち實驗と産業とである」と。此の驚くべき認識論的議論は次のやうにして行はれる、即ち、「若しも吾々が、吾々が自然現象そのものを作り、それを、その諸條件から生産し、それを其上尙ほ吾人の諸目的に役立ち得るようにならしむる事によつて、自然現象に關する吾人の理解の正しさを證明する事を得るならば、さうすれば、カントの擱み様のない「物それ自體」は

なくなつて仕舞ふ」と。私は思ふ、此れ以上激しく此の模寫説の幼稚な獨斷論を暴露するものはないと。由之觀之、エンゲルスが、六十年代と共に初まつた、英國に於けるヒューム、竝にドイツに於けるカントの學説の復活の中に「つとに爲されたる理論的及び實踐的反駁に比すれば」——即ちヘーゲル及びエンゲルス、經驗及び産業に比すれば——「科學的には」單に一つの「退歩を、而して實踐的には、單に、——唯物論を背後では受け容れるくせに表向きには否定すると云ふ一つの恥すべき遣り口を」見ると云ふのは、未だ何等驚くに足らない。然り、ヘーゲル及びフオイエルバツハのなせるヒューム及びカントの理論的的反駁は畢竟、一つの *opus operatum* (何等の思慮も目的もなくなされし勞作——譯者註) のやうに見える。蓋し、デカルト以後の哲學を「眞に驅り立てたもの、それは、特に自然哲學及び産業の強大にして、加速度に突進する進歩であつた……、だから結局はヘーゲルの體系は單に方

法及び内容上觀念論的に顛倒せられた一唯物論を表すに過ぎぬ」(註)が故である。

此れに對して、正しき批判を下さんと欲する者は、吾々の敘述を導く二つの要素に注意せねばならぬ、即ち、模寫説はマルクス主義的學説の本來の内容の構成部分ではなくして、一つの外觀上自明の如く見える前提であると云ふ事、及び、此の前提はその當時の精神的大氣の中にあり、その時代の子等は、カントに對する形而上學的的反動が餘りに激しい爲に、ヒューム及びカントの精神的勞作の基本的意義に對する了解を失つてゐたと云ふ事である。

斯るが故に、吾々は唯物論的歴史觀の創始者達が、彼等が前提する形而上學的模寫説を何等吟味する必要のないものであると思つたと云ふ事を了解する事は出来る。然しながら、總を理解する事は總を許す事であると云ふ主張が如何に人を迷はすものであるかと云ふ事は、此處にもまた表れてゐる。蓋し、吾々の現實に

關する價值判斷は因果關係への洞察を前提としてゐる、だが、その妥當性は此の洞察に依存するものではなくして、吾々の判斷の標準である規範に依るものであるが故である。此の唯物論的歴史觀の第一の哲學的前提は、それが歴史的に見て理解し得るものであると丁度同じ様に不充分なものである。

斯くて、唯物論的原則を信奉する背信的ヘーゲル學徒が、彼等の始祖と區別せらる所以は、形而上學的模寫の爲ではなくして、彼等があだかも此の前提の下に於いてヘーゲル及び「觀念論的」形而上學一般のより特殊なる形而上學的假定を放棄するが故である。

註、原文に於いては此の最初の括弧は落ちてゐる、多分誤植であらう。譯者は Engels, L. Feuerbach, 8. Anh. に據つて、これが當然あるべきと思はれる所に括弧を入れた——譯者註。

B 形而上學的唯物論

吾々は、マルクス及びエンゲルスにとつて、實在に

唯物論的歴史觀の哲學的諸前提

關する如何なるより特殊なる假定が、ヘーゲルの形而上學的假定の代りに、現れるかを決定せんと欲するが故に、吾々はマルクス主義の第二の哲學的前提、即ち經濟的歴史觀を唯物論的歴史觀となすところの、丁度その前提に到達する。此の前提を陳示することは、同時に、吾々に、マルクス及びエンゲルスに於ける模寫説の獨斷論に對する實質上の基礎を示す。蓋し、模寫説こそ吾々に始めて、何が故に、マルクス及びエンゲルスの理論が、ヘーゲル學派の分裂が全く確實となつてしまつた以後に於ても未だ尙ほ、ドイツに於ける精神界を充たしてゐたかと云ふ事に對する了解を與へるものであるが故である。マルクスは元來ヘーゲル學徒であつたと云ふ事實は、彼及びエンゲルスがヘーゲルに對して反對するに至つた事を考へるならば、斯くの如き事を了解するには明に充分ではない。

マルクス主義の歴史觀が唯物論的である所以は、現實なる對象の「映像」が吾人の「イデー」であるべき

場合に、この現實の對象は單に、種々なる運動状態にある物質にすぎないと云ふ形而上學的主張——蓋し、吾々は此の假定をもまた最初から斯く呼んでも構はない——にあるのである。

此の假定もまた、實際、最初に引用せられたエンゲルスの言葉の基礎を爲してゐる。假令この假定は、既に示せるが如く、此等の言葉の中に明確には云ひ表されてゐないとしても。何故なれば、吾々はエンゲルスのフオイエルバッツハに關する論文の中に於いて次の様な事を読むが故である、即ち曰く、「思惟と實在、精と自然との關係の問題、即ち全哲學の至高の問題は……、歐洲の人類がキリスト教的中世の長き冬眠から醒めた時に、その問題がもつ充分なる鋭さを以て初めて提出せられることができ、それはその全意義を初めて獲得する事が出来たのである……」。此の問題が如何に答へられるかにつれて、哲學者は二大陣營に分れた。自然に對して精神の本源性を主張する、その人々

は……、觀念論の陣營を構成し、自然を本源的なるものと見做した、その他の人々は唯物論の種々なる學派に屬する」と。

此等の言葉の中に顯れてゐる、中世紀の精神的發展の評價に就いては、吾々がマルクス及びエンゲルスに於いて見出すところの中世史の經濟的諸條件への歴史的洞察と此の中世の精神的發展との間の對照は甚しいには違ひないが、論じない事にする。かの時代の思潮に對する吾々の歴史的的理解内に於いて、啓蒙哲學より見た評價に對向して起つた、評價の仕直しは、前世紀の四十年代には殆ど始まつてはゐなかつた。中世紀への神祕的な、ロマン主義的な熱中は斯かる事を了解する程充分ではなかつたのである。吾々は確に、現代周知の諸現象より、吾人が現世紀に於いて得たる歴史的洞察が、吾人を精神的に中世から引き離すところの對照がある爲に、如何に遅々として漸次滲透普及して行くか、と云ふことを知つてゐる。吾々は、ただ、エン

ゲルスにとつては、彼が全くヘーゲル流に、思惟と、實在との間の對照として云ひ表してゐることの、認識する主體と認識し得べき客體との間の對照の代りに、此れまたヘーゲルの意義に於いて、此れよりも遙かに狭い精神と自然との間の對照が置き換へられるのは如何に勿論のことであるかと云ふ事、而して、此の狭化に應じて歐洲の哲學的發展が、觀念論と唯物論との間の既述の分離に歸せしめられると云ふ事に注意する。此の分離が理論的哲學の歴史を、單に歐洲の形而上學的發展に對してのみ正鵠を得るのにさへ未だ遙かに不十分なる視界を有するにすぎないところの着眼點から觀察せしむると云ふ事に就いてもまた此處では論及せられることは出来ない。

吾人の興味を惹くものは、此處では、單に、エンゲルスは「精神」に對する「自然」の下に何を解するかと云ふ事である。此の事に就いては、然しながら、既に最初から何等の質疑もない。つい先程明にした様に、

唯物論的歴史觀の哲學的諸前提

此の對立は此れと同じ語法でヘーゲルの思想中にその端を發してゐる。ヘーゲルの表現方法に於いては自然とは「有としての理念、有る理念」であり、さうして「その規定態の形式は、空間及び時間の絶對に自己自身に對して主體性なく有る外性 (Aeusserlichkeit) ……」、「他在の形式に於ける理念」であり、それは「それ自身の否定的なるもの」として「自己に對して外的である、だから、それは外的に自己自身に對して（及び理念の主體的存在、即ち精神に對して）單に相對的であるのみではなく、外性は限定を形成し、その限定の中に於いては理念は自然である……」。實質とは一己自身外的なるものである」。此の不明瞭な言ひ廻しの意義は、自然とは空間及び時間を充たす實質であると云ふことである。

エンゲルスの説明は、全く望ましい位に確實に此れに一致してゐる。吾々は、反デューリングの論争書から次の様な事を知る、即ち曰く、「世界はそれが單一で

あり得る以前に先づ在らねばならないが故に世界の實在は世界の統一性の前提であるにも拘らず、世界の統一性は世界の實在の中にあるのではない……。世界の眞の統一性はその唯物性の中にあるのである、さうして、此の唯物性は手品師の二三の無駄口によつてではなくして、哲學及び自然科学の長いさうして永續せる発見によつて證明せられてゐる……。蓋し、有らゆる實在の基本形式は空間及び時間であり、時間の外にある實在は、空間の外にある實在と丁度同じ様になる無意義であるが故である……。運動とは物質の存在様式である。決して、さうして何處にも、運動なき物質なるものはなかつたし、又ある事は出来ない……。生命とは蛋白質の存在様式である。而して此の存在様式は、此の蛋白質の化學的構成要素の不斷の自己更新の——即ち原子運動の——中に、その本質を有してゐる」……。「思惟と意識とは一體何であるか、さうして、それ等は何處から由來するものである

かを尋ねるならば……。それは人間の腦髓の所産であり、さうして人間自身は、その環境の中に於いて、さうしてその環境と共に發展したる自然所産であるといふ事が分るのである。さうだとすると、その際、結局は實にまた自然所産である人間の腦髓の産物はその他の自然關係に矛盾するのではなくして、適應するのであると云ふ事は勿論である。「フオイエル、バツハの學說に對する批評もまた、此れと同じ様になされる、即ち、「唯物論は自然を」——即ち運動せしめられたる物質を——「唯一の現實なるものと解するが、ヘーゲルの體系にあつては自然は單に絶對的イデーの「外化」謂はゞイデーの貶黜を表すに過ぎない。何れにしても此處では、思惟とその思想所産、即ち觀念は本源的なものであり、自然は、觀念一般の卑下を通じてのみ存在する一の派生せられたるものである。而して、此の矛盾の中に於いて人々は善かれ悪しかれとまれ一生懸命で右顧左眄行きつ戻りつしてゐた。その時に當つて現

れたのがフオイエルバツハの「キリスト教の本質」であつた。それは此の矛盾を、唯物論を手つ取り早く再び玉座に引きあげる事によつて、一撃の下に粉碎した。

自然は有らゆる哲學より獨立して存在する、自然は、自身自然所産である吾々人間が發育して來るに際しての基礎である。自然及び人間以外には何ものも存在しない………。反抗し得べからざる力を以て迫られてフオイエルバツハは遂に……吾々自身が所屬してゐる物質的な、感覺的に知覺し得る世界が唯一の現實なるものであり、而して吾々の意識及び思惟は、それが如何に超感覺的に見えるとも、一つの物質的、肉體的器官、即ち腦髓の所産であると云ふ見解を止むを得ず取るのである。物質とは精神の所産ではなくして精神が自身たゞ物質の至高の所産であるに過ぎない。此れは勿論、純粹なる唯物論である」と。

斯くの如き假定は、同様な方法で、マルクスの形而上學的基本原則をなしてゐる。この事を論證するのは

一八四五年の「神聖家族」の中に於ける彼のフランスの唯物論史の素描^{スケッチ}である。この事はブルードンに對する反駁論書中の屢々引用せられたる説明が證明してゐる。即ち曰く、

「存在するすべてのもの、地上及び水中に生活するすべてのものは何等かの運動の助をかへりてのみ存在し生活する。かくて歴史の運動は社會關係を生産する………。經濟學者は吾々に如何にして此等の所與の關係に於いて生産するかを説明する、然し彼等が吾々に説明しないもの、それは即ち如何にして此等の關係が生産せられるかと云ふ事である。即ち此等の關係をして發生せしむる歴史的運動である」と。

最後に、この事は既に引用せられたる通信によつて確證せられてゐる、その通信に據ればマルクスはエンゲルスの反デューリング説を、それが公開せらるゝ以前に知り且つ是認してゐたのである。

斯くて吾々は此處に、まがうかたなく「純粹」なる

終始一貫せる唯物論をもつ、即ち、それは、有らゆる實在は、精神的實在も亦、何等かの種類の小分子の（エンゲルスの假定するところによれば、分子及び原子の）置位變更及び運動に、分解せられると云ふ形而上學的主張であつて、今日の通俗なる著書の中で一元論と呼ばれる、あの謂はと恥すべき唯物論的學說ではない。エンゲルスは此點に就いてはまた別に何等の質疑をも残しはしなかつた。フオイエルバッハに關する著作中に於いて彼は更に進んで説いてゐる、「吾々は吾々の頭腦の中の概念を、現實の事物を絕對的概念の彼此の階梯の映像として把握する代りに、現實の事物の映像として再び唯物論的に把握した。それと共に辨證法は外的世界並に人間の思惟の運動の普遍的諸法則に關する科學に變じた。——即ちそれ等の法則は二列の法則であり、それ等は實質上同一ではあるが、然しながら、表現上それ等は相異つてゐる、即ちそれ等は、自然の中に於いて且又從來また大部分は人類の歴史の

中に於いて、無意識裏に、外的必然性の形式に於いて、無數の外觀的偶然性の直中で適用せられてゐるのに、人間の頭はそれ等の法則を意識を以て適用し得るといふ限りに於いて相異つてゐる」と。一切の此等の特殊、明白なる説明を吾人は、若し吾人が、丁度此處に關聯してゐるところの次の様なエンゲルスの全く正確ではない一般限定は、そもく何を語るべきであるかと云ふ事を公平に理解せんとする以上、念頭に置かねばならぬ、即ち曰く、「ヘーゲル哲學よりの分離は此處に於いてもまた唯物論的立場への歸還の結果であつた、と云ふ事は人々は現實の世界——自然及び歴史——を、それが、先入觀による觀念論的妄想なしにそれに歩みよるところの各人に、自分自身の何物たるかを示すがまゝに把握せんと決心したと云ふ意味である。人々は、それ固有の關係に於いてとあつて、何等の空想的關係に於いてとはなく、把握せられたる事實と調和しないところの一切の觀念的妄想を容赦なく憐

性に供すべきを決心した。而して唯物論には此れ以上全然何の意味もない。唯だ、此處では唯物論的世界觀が眞に慎重に取扱はれ、それが知識の有るとあらゆる領域に——少なくとも原則に於いて——徹底的に貫徹せられたのみである」と。

マルクス及びエンゲルスに於ける此の唯物論の直接の起原に關しては何等の質疑もない。彼等は唯物論を直接フオイエルバツハから襲受した。フオイエルバツハの唯物論は、大體に於いて人類學の域を出でなかつたにも拘らず、公平なる研究に對しては確立してゐる。間接にはそれはフオイエルバツハが汲んだと同じ源泉からマルクス及びエンゲルスに流れ込んだのである。此等の源泉の一は、有らゆる實在は結局その内的本質に従へば精神であると云ふヘーゲルの主張に對する反對論、即ちヘーゲル辨證法の出發點に對する自然的反對論に始まつた。此の反對論中には、然しながら、單に本源的なる動機が在るのみであつて、此の

正反對なる形而上學的偏重性への激轉に對する實質的なる根據があるのではない。フオイエルバツハに對しては起源的及び追加的に、マルクス及びエンゲルスに對しては追加的に、如何なる哲學が彼等によつて選ばるべきであるかと云ふ判斷を保證したところのものは哲學的反動のより一般的なる諸條件である。

此の後者の一組の原動的諸條件を正確に了解するが爲めに、吾々は、一時、唯物論的歴史觀を放置して、近世唯物論一般の起源的條件に轉ずる事にする。

唯物論は機械的、自然觀の一の見易い形而上學的歸結として、即ち、有機並に無機の有らゆる物理的現象を、或は連續性假設に於けるが如く、物質は空間を全然填充すると假定するにしろ、或は原子的假設に於けるが如く、小分子間の空の空間を假定するにしろ、何等かの方法でより精密に定められたる小分子の運動現象に歸せしめるところの學說の一の見易い形而上學的歸結として、常に新に出現する。古典的古代に於けると同

じく十七及び十八世紀に於ける唯物論は機械的自然觀の結果として形成せられた。唯物論が特にフランス啓蒙哲學中に於いて勤めた重要な役目は著名である。十九世紀への轉換期に於けるフランス及びイギリスの社會主義中に於ける唯物論の地位に對してマルクスがなした補充的論及に就いては尙ほより特殊なる研究を要する。マルクスと雖も等閑に付してゐたところの此處に尙ほ一層重要な事は、唯物論は、また同時に、ダレムベール以後の偉大なる佛國の數學者達をして機械的自然觀の完成に向はしめたる豊富なる勞作に對して一の屢々白日の下に顯れるところの底流をなしてゐると云ふ事である。蓋し、此の加工の基礎の上に、十九世紀の三十年代以來ケプラー及びガレリーによつて、竝に、特にニュートンによつて基礎づけられたる機械的自然觀が、本文の冒頭に述べたる如く、ドイツに於いても亦確固たる立場を獲得し始むるが故である。此の發展の諸重要事項は屢々比較對照せられた事がある。

故に此處では、かの時代以來、物理的現象の機械的模寫が近世自然科學の誇るべき一切の偉大なる理論的及び技術的結果に對する嚮導思想となつた事に注意するのみで充分である。將に死せんとするカント以後の形而上學が吾國に於いて爲したる反抗はかくも堅固なるものではあつたが、その反抗は、それにも拘らず、新なる進路に於いて獲得せられたる驚嘆すべく而して迅速に向上する進歩に對しては羽毛の如く輕きものであつた。四十年代の向上努力的時代が此の思考方法に精進したのは何等驚くに足らない。此の時代の、哲學的に興味を有する者の大部分(竝に個々の晩果)が成功の喜びのあまり、人類のいとも古き謎を、自然科學的方法と假設とを單に精神的現象の上に移す事によつて一つの原則に於いて決定的なる解決に導くが爲めに、あらゆる道を開いたと誤信するのもまた怪しむに足りない。斯くて自然科學的唯物論は四十年代以來吾國に於いては、古くより傳へられたる哲學的及び宗教的先

入觀よりの解放の一見屈服すべからざる城塞、即ち有らゆる「自由なる精神」に對する一つの集合點となつたのである。

マルクス及びエンゲルスは此點に就いてもまた彼等の時代の精神の子である。マルクス自身既に一八四五年の反ブルノー・パウエルの著作中に於いて精細なる研究の上に立つて説いてゐる、即ち曰く、「十八世紀の佛國の啓蒙、而して殊に佛國の唯物論は、當該宗教及び神學に對するが如く、當該政治制度に反する鬭争であつたばかりでなく、それと同じく十七世紀の形而上學に對し又有らゆる形而上學に對する一の公然たる、一の堂々たる鬭争であつた……。人々は恰もフオイエルパツハがヘーゲルに對抗して初めて儼然として現れて來た時に際して、泥醉せる思索に冷靜なる哲學を對置せるが如く、形而上學に哲學を對置した……。ヘーゲルがドイツ哲學を、天才的方法を以て、一切の從來の形而上學及びドイツ理想主義と融合せしめ、か

くして一の形而上學的萬能帝國を築いてしまつた後で再び、十八世紀に於けるが如く、神學に對する攻撃に適應して、思辨的形而上學に對し又一切の形而上學に對する攻撃が起つた」と。

十八世紀に於ける佛國の唯物論史の既述の素描と、かの時代の唯物論の起源に關する上記の説明との間の對照に就いては私は此處に論及しないが、その十八世紀の唯物論史の既述の素描のあとを受けて彼は續ける「人間の本來の善良性及び同等なる知的天賦、經驗、習慣、教育の全能、外的境遇の人間に及ぼす影響、産業の貴重なる意義、享樂の權能等々に關する（佛英）唯物論の諸教理から、その唯物論と、共產主義及び社會主義との必然的關聯を洞察するが爲めには、何等大いなる炯眼をも要しない」と。

マルクスは此れが爲めに特にフリーエー、バビヨウ主義者、ヘルヴェチウス、ベンサム、オーエン、カベール、デザアミー、ゲイを引證する。

マルクスが此處に力説する人間の原始的性質に關する結論に就いては姑らく此れを措く。差し當り、單に上述の事情を確める事のみが吾人の興味を引くのである。特に十八世紀の佛國啓蒙哲學の中に於いて表面に現はれ、さうして十九世紀の四十年代と共に、殊にフオイエルバツハ（一八四一年）の效果多き出現によつて吾國に於いてもまた人心を充たし始めたところの機械的自然觀の外觀上唯物論的なる諸歸結は、それ故、實際、マルクス及びエンゲルスに唯物論的理論を保證したところの環境を示してゐる。斯くて吾々は、兩者をして、フオイエルバツハと同じ様に、唯物論と謂はゞ、腕を組ませるところの事實上の諸條件を了解する事が出来る。

此の歴史的にして又實質的なる分析のもう一つの確證を提供するのは、如何にして殊にエンゲルスは、彼が再三再四、四十年代及び五十年代のドイツ唯物論の——彼がそれを呼ぶところによれば——「卑俗化する

行商人」を拒否するにも拘らず、彼の時代に於けるドイツ及び英國の自然科学の偉大なる歸納を引證するか、その方法である。正しく、彼は、それに際して、フオイグト、モレシヨット、及びビユツヒネルの如き此等の自然科学的唯物論者達と殆んど同様に、非批判的な方法をとつてゐるが故にこそ、彼は、略々フオイエルバツハ及び、その後では、ダヴィド・フアリードリツヒ・シュトラウスなどと同様（註）に半可通に、彼の立場の確實であると云ふ事を自負的に論證するのである。

斯くて吾々はまた、如何にして唯物論的歴史觀の此の第二の哲學的前提が、その理論家達によつて、またもや、無批判も同様にして固持せられてゐるかと云ふ事を了解することは出来る。然しながら、此處に於いてもまた、この前提の内容をも、その内容を認容する方法をも妥當であると認める事は出来ないのである。蓋し、唯物論を批判的に採用すると云ふ事は、勿論、先づ第一に、マルクス及びエンゲルスが彼等の時代が

ら見て必要であると思つたよりも尙ほ一層強固なる武器を要求するであらうが故である。吾々が吾々の感覺及び表象に於いて、竝にそれに應じて吾々の意慾に於いて、直接、現實なりとして經驗する精神的諸生活過程は、その固有の本質上、吾人の神経系統の中樞部に於ける、殊に云はゞ略々吾人の大脳皮質部の細胞内などに於ける運動過程以外の何ものでもないと云ふ事を證明するのは、唯物論の義務である。此等の細胞の最小の物質的構成部分に於ける一定の運動、即ち、結局は多分神経細胞の蛋白質分子の原子への化學的電氣的分析は、かくて、丁度吾々が感覺表象及び意志過程として經驗するところの、そのものであるべきである。未だかつて、然しながら、カント以前の唯物論者は單に斯くの如き證明に對する傾向をすらも齎す事は出来なかつた。あの總ての唯物論者中で最も鋭い頭腦をもち、さうして最も思想に富めるホッブスにすら、あらゆる實在するものは物質的性質を有し、それに應じて、あ

らゆる變化は單に運動であると云ふ事は、寧ろ機械的自然觀の一つの自明の歸結にすぎないと思はれてゐたのである。此れと同様に、此の歸結はフオイエルバッハ、マルクス及びエンゲルスにとつて、自明であると思はれたのである。批判的讀者にして、かゝる假設を自然科學的、生理學的或は認識論的にすら基礎づけるところの説明を彼等に索ぬるともそれは徒勞である。反デューリングの論争書中に於ける自然科學的研究の結果の諸引證は、エンゲルスの明白なる説明に従へば彼が如何なる程度まで、機械的自然觀及びその外觀上唯物論的なる諸歸結を突込んで考へたかを明にするところの單に一の詳論的補正に過ぎない。それ等の中に吾々は、またその諸研討に於けると同じく上記の吟味によれば、單に唯物論的主張を見出したのであつて、眞面目なる立證の試みを見出したのではない。或は、それは、エンゲルスがある機會に次の様に説いてゐる以上、此種の一つの幼稚なる主張以上である。即ち曰

「人間を動かす一切のものは、その頭の中を通過せねばならない——飲食ですら、それは頭によつて感ぜられたる飢餓及び渴きの結果生じ、さうして同様に頭によつて感ぜられたる飽滿の結果終りを告げる、と云ふ事は何うしても避くべからざる事である。外界の人間に及ぼす影響は人間の頭の中に表現せられ、その中に感情、思想、意志決定として、約言すれば、イデーの「潮流」として反映し、かくて此の姿態に於いて「イデー上の力」となると。教養なき者と雖も直に、此處に於いて唯物論は、精神的過程を機械的「印象」であり、而して同時に、運動の「映像」である、夫故に、運動ですらあるときめてしまふ爲に、模寫説の前提の下に於いて利用せられてゐると云ふ事を認める。

此れは決して唯物論の科學的紹介ではない。加之、唯物論自身最早一の科學的學說と見做される事は出来ない。たゞ近世の心理學的及び認識論的研究の精神と

何等の接觸をもたないでゐる者のみが、今尙ほ唯物論を代表する事が出来るのである。

私は此の事を簡單に證明せねばならぬ。現代の心理學は、精神的な生活過程は機械的なるそれと一般的に、例外なく、法則的に連結せられてゐると云ふ事、それ故に、具體的に云ふならば、吾々の身體の中に於いては感覺、表象及び意欲の如何に發達せる過程と雖も、その過程に吾々の神経系統の中樞部に於ける一定の運動過程が適應せずして行はれるものは全くないと云ふ事を前提とする。然しながら、現代の心理學は時代の如何を問はず、獨立せる心理學的研究に對するが如く、今日唯物論に對して、精神的な生活過程が、單にその最も單純なる形態に於いてすらも、運動過程として解釋せらるゝ事に反對する。例之、吾人が直接、現實なりとして經驗する音響の認知、或は吾々が或る與へられたる瞬間に於いて感ずるところの痛みは、それが吾人の大脳の細胞内に於ける一定の運動過程と直接、法則

的に連結せられてゐると云ふ事によつて、此の運動過程自身とはならない。一の運動は任意の速度、任意の形態及び方向を持ち得る。然しながら、その運動が音響と云ふ意味に於いて高いとか低いとか、その運動が苦痛だとか快感だとか云ふのは無意義である。その運動は高いとか低いとか、苦痛であるとか快感であるとか吾々によつて感知せられ或は感受せられるのである。それと同様に第二には心理學的分析が既に、吾々の認知表象に矛盾してゐる。吾々は一の音響を、それを組織してゐるところの部分音に分解する事は出来る。だが此の音の感知を運動に分解し、その運動を通して音の感知が心理學的立場から見て條件づけられる事は出来ない。

唯物論は自分の比喩的言辭によつて欺かれさへしないならば結局は斯る事を是認するのである。外的世界は吾人の頭の中に於いて「反映し、」その中に於いて「型取られる」——此れは只今説明したところによれば

唯物論的歴史觀の哲學的諸前提

單に次の様な意味であるべきである。即ち、吾々の感官に作用する外界の運動過程は、吾々の神經系統の中樞部に於いて、感覺及び思想、感情及び意志過程と法則的に結合せる運動を制約すると。それ故、精神的過程が法則的に決定せられてゐると云ふ主張に就いては何等の異議もない。此れに反し、精神的過程が纖維體の運動過程、或は機械的作用であると云ふ唯物論的主張は、他の方面で云へば、一の主格の内包が賓辭を除外するが故に、その主格に屬する事の出来ないところの賓辭をその主格に就いて云ふ事が一つの矛盾であるが如く、一つの矛盾である。

此の點に就いて唯物論の比喩的言辭の中に蓋はれてゐる矛盾は、此れよりも一層深い原因をもつてゐる。萬一此處が認識論的吟味をなすべき場所であるならば、かゝる場合に於いて大部分はさうである様に、問題が誤つて出されてゐるが故に、答が矛盾せるものとなると云ふ結果となるであらう。外的、物的自然の總

ての解釋の出發點を形成するものは、吾人の感覺的認知表象の構成部分として吾人に與へられてゐるところの事實である。ありと有らゆる自然觀の、それ故にまた機械的自然觀の結論は、假定から成り立ち、吾々の思想上の表象は、若しもその表象がかの事實を、説明せんとする以上、即ち吾人の思惟に對して普遍的法則の箇々の場合として説明せんとする以上、かの事實を基礎として此の假定に向つて導かれるのである。斯くて、吾々が出發するところの事實、竝に吾々がその事實から誘導するところの假定は同様に表象内容であつて、此の表象内容を以て吾人の思惟が活動するのである。さうして、此の誘導の方法は吾人の思惟の形式である。ゲーテが「至高なるもの」と見做したるもの、

即ち「有らゆる事實に基づけるものは既に學理である」と云ふ事を認識する」と云ふ事、それはヒューム及びカントが古き形而上學に對して對立せしめたる認識論の根本的歸結である。斯くて機械的自然觀の諸假説

は、視覺の直觀及び觸覺の統制し得る認知を基礎とせる諸機械的映像となり、これはその數學的に決定し得る方法に於いて、吾々をして、感官認知の諸對象及び吾人より異なる存在に關する此等の對象より派生誘導し得る諸對象を、認識せしむるところのものを象徴化する。

此の見地より觀れば唯物論は哲學的思索の地平線より消え失せる。

註、此の「同様に」は原文では *eben* となつてゐるが、それでは文章全體が意味をなさないから、譯者は、此れを *eben* の誤植として取扱つて翻譯した——譯者註。

C 心理學的經驗論

恰も現在に於いて多くの人々に、形而上學的模寫説及唯物論的假説ほど不充分には見えないのは、同じく既に最初に引用せられたるエンゲルスの言葉の中に觀はれるところの第三番目にして且最後の一般的哲學的

前提である。彼處では總括的に云はれてゐる、「人間の意識は、人間の實在から説明せられねばならないのであつて、觀念論的哲學に於けるが如く、人間の實在が人間の意識から説明せらるゝのではない」と。此處に、認識的研究の基本思想の誤謬と同様に、吾人の思惟が供給すべき實在の寫像の起源に關する一の特種なる假定が横たはつてゐる。今此處に取り扱ふのは、唯物論と大抵の場合は結び付けられてゐる經驗論、即ち、總ての吾人の認識は排他的に經驗から出て來ると云ふ學說である。既に引用せられねばならなかつたところのエンゲルスのヘーゲル批判中に於いてもまた、此の經驗論は云ひ表されてゐる、即ち「吾人の思想は」——徹頭徹尾——「單に、現實の事物及び過程の多かれ少なかれ抽象的なる、」其故に、多少なりとも普遍的なる「模寫に過ぎない」と。斯くて、マルクス及びエンゲルスの模寫説を、心理學的方面から見て、觀念論的模寫説に對立せしむるものは、此の經驗論である。此れ

に適合して、此の經驗論は、またもや、其の當時の唯物論の當然の歸結の中に横たはつてゐる。若しも人間の思惟が、「窮極に於いて人間の腦髓の一つの自然所産」であるならば、「人間の腦髓の諸産物は、その他の自然關係に順應する、」即ち、實質上、外的世界の諸法則と同一であると云ふ事は、「自ら」實際「明である。」此の人間の腦髓の諸産物は、正にかの法則の「覆刻」或は「映像」である。吾々は、此れに適合して、次のやうな事を讀む、即ち、「實在の、即ち、外界の諸形式を、思惟は單に外界からのみ汲み取り而して派生し得るに過ぎない……、それ等は自然及び人間の歴史から抽象せられる、而して斯るが故に、「單に、此れ等が自然及び歴史と一致する限りに於いてのみ、正當である。此れが、事物の唯一の唯物論的見解である」と。此の點に關してコムトの實證論に對して存在するところの實質的類似は、——歴史的な相關關係は全くないと思はれる——次の様な同種の歸結及び表現方法をす

ら生ぜしめる、即ち「若しも吾人が世界法式論ワニルトンエマテムを頭腦からでなく、單に頭腦の助けをかりて現實の世界から、實在の原則を在るところのものから導き來るならば、然らば、吾々がそれが爲めに要するのは、哲學ではなくして、世界に關し且又如何なる事が世界の中で起るかに關する實證的知識……であり、自然及び歴史に關する實證的科學である、——さうして、その際出て來るものは、同様に、哲學ではなくして、實證的科學である」と。

吾々は、經驗論の最も外面的なる結論すらが、マルクスに於いては偶然の轉向以外に原則として、エンゲルスによつては、或る特別な決定的な點いに就て、引かれてゐるのを見出す。此の原則的な思想に對しては吾々は、十八世紀の佛國の唯物論は、「人間の同等なる知的天賦、經驗、習慣、教育の全能、及び外的狀態の人間に及ぼす影響に關する」諸理論を基礎とせる社會主義と必然的な關係に立つてゐると云ふ、上に引用

せる説明を想ひ起す。それは、唯だ經驗によつてのみ記入せらるべき一つの空虚なる書板としての靈に關するあの古い平等の、即ち、經驗論が常に自己の爲に要求してゐたところの平等の一變化態である。此れと丁度同じ道を行くものは、數學の起源に關するエンゲルスの説である。彼は何等躊躇する事なく次の様な事を主張する、「數及び形の概念は、現實の世界以外の何處にも由來するものではない……。數へる事には、單に數へうる」——勿論、現實的、物質的——「諸對象のみではなく、此の對象を觀察するに際して、その對象の數以外の、その他の有らゆる特質を除外する能力もまた、既に屬してゐる——而して此の能力は長い歴史的、經驗的發展の所産である。數概念と同じく、形概念もまた全然外界から引き出されたものである……」。吾人が形概念に達する事の出來る以前に、形體を有し、而して其の形體を吾々が比較した、その事物が存在せねばならない……。一つの壙の形態を、矩形の、そ

の一邊を中心とせる廻轉から導き出すと云ふ表象に達する以前に、吾人は多數の矩形及び壘を研究して仕舞つて居らねばならない……。かくて純理數學は、正に此の世界から抽き出され、又單にその組成形式の一部分のみを表はし——而して正に斯るが故にこそ一般に適用し得られるのにも拘らず、現世界に適用せられる！」と。

斯くして、吾々は、また模寫説及び唯物論の形而上學的假定より獨立して、古くから唱へられて來たとこの假定に當面する。然しながら、フオイエルバツハの感覺論的學説よりの、竝に十八世紀及び十九世紀への轉換期の英國及びフランスの感覺論及び經驗論よりの此等の心理學的思想の受容は、マルクス及びエンゲルスに於いては、既に示さるゝを得たるが如く、かの形而上學の見解の採用に劣らず非批判的である。此處にもまた、一の學説と云ふよりも寧ろ一つの吟味せられざる前提、しかも前述の兩前提に比すれば、尙ほ

一層少しか説明せられてはゐないところの前提が横はつてゐる。蓋し、何人と雖もマルクスの原則的説明、竝にエンゲルスの註釋的發表を、證明としては認めないであらうが故である。エンゲルスの數學的概念に關する解説は、吾々が既に觀たやうに、コムトの假定と相觸れてはゐるが、コムトの學説はエンゲルスに於いてすら、既に此の學説の社會的推斷が唯物論的歴史觀と相反してゐるが爲めに、顧慮せられてはゐない。エンゲルスの解説は、あの屢々社會主義的文獻中に於いて罵倒せられたるスチユアート・ミルが、彼の論理學中に於いて、竝に彼の周到にして明敏なるウイリアム・ハミルトン批判中に於いて爲したる詳細なる論述と、尙ほ一層密接に類似してゐる。然しながら、エンゲルスの説明は、此の點に關しては、確かに數學的には無價値であり、心理學的には——此れ以外には批評の仕様がなないであらう——生である。であるから、それはスチユアート・ミルの證明の企圖には遙に及ばない。

併しながら、實質的には、唯物論的歴史觀の經驗論は、唯物論的歴史觀の二つの形而上學的前提と同じ意味に於いて、不充分であると見做されてはならない。ヒュームは、感覺論と軽く相觸れてゐるところの經驗論の上に、彼の認識論的研究を築いた。吾が同時代のドイツ哲學に於いては、認識論的基礎づけられ、而して目的を意識せる經驗論が、自然科学的思索方法及び新に強固となれる哲學的反射の所産として、唯物論を除去して仕舞つた。唯物論に左袒するものは、たゞ單に四十年代及び五十年代の自然科学的亞流者達のみである。最初、前世紀の六十年代に於いて、その武器を佛國及び英國の經驗論の陣營から、即コムト及びブスチユアート・ミルから、得たる新なる認識論的經驗論の最も優秀なる代表者は、アヴェナリウス及びエルンスト・マツハの如き學者である。吾國で、カント化せる、フイヒテ化せる、而して最近ではまた、ヘーゲル化せる主理論に於いて、英佛經驗論に對立せしめらるると

ころのものは、此の經驗論に對する批判的地位に依存してゐる。然しながら、現代の經驗論は、マルクス及びエンゲルスに提供せられてゐたよりも遙に豐富なる心理學的及び認識論的手段を以て、研究してゐる。マルクス及びエンゲルスが、此の點に關して主張したところのものは、フランス及びイギリスの啓蒙及び革命哲學の立脚點を越えてはゐない。此等の哲學の假定の一行は、願はくば永久に、失墜してしまつた。就中、白紙 (tabula rasa) としての靈、或は經驗の全能に關する、原則的なる、マルクス及びエンゲルスによつては偶然的轉向に於いて制限付きで固守せられたる思想、然りである。此の思想を明瞭に否認するものは、その後、人類學及び人種心理的、小兒及び犯罪者の心理學及び精神病理學、感覺記憶の心理學、竝に——
Last not least ——— 動植物界に於ける遺傳に關する諸研究によつて、確說せられたる事實である。加之、人間の本來の善良さに關する、あの古い假定は、ルソー

が開いたる新生面に於いてすら、決して唯物論的歴史觀の確乎たる構成部分とはならなかつた。かの思想は吾々の一切の行動、殊に經濟的行動の事實上の動機の面前では、單に、理性の全能に對する啓蒙哲學の幼稚なる信仰に對する反動の徵候としてのみ了解せられ得る、假令それは、ルソーに於いては、丁度此の信仰と結び付いてゐたに似たところで。それは、吾々がマルクス及びエンゲルスに於いて經濟的發展の條件に關して見出すであらうところのより、特殊なる論述中では、人間の行爲の發條ペネに關する遙により、慎重なる見解の下に失はれてゐる。それは唯だ、社會主義的未來社會の夢想郷の上に蒼白い光を投げてゐるのみである。結局は、マルクス及びエンゲルスと雖も、吾人は知的及び道德的に、相異なれるものとなるのではなくして、種々なる道德的及び知的素質をもつて生れて來たものであると云ふこと、それ故に、經驗の力は、先天的素質が判然としてゐれば、ある程、それだけ制限を受けると

云ふ事を、知つてゐたのである。

(二) 推 斷

A 唯物論よりの

唯物論的歴史觀の一般的哲學的前提は余には上記を以て盡されたりと思はれる。吾々は更に進んで、如何なる斷定が此の歴史觀の爲めに此れ等の諸前提から生ずるかを尋ねよう。

エンゲルスは、フォイエエルバツハは「單に自然科學的なる唯物論は確に人間の知識の建物の基礎ではあるが、然しながら建物そのものではないと云ふ點に於いて全く正鵠を得てゐた、然しながらフォイエエルバツハには歴史科學の爲めに必要なる斷定を下す事は許され

なかつた、彼は「依然として傳統的觀念論的羈絆の中に囚へられて」ゐた、何故ならば彼は「後方に向つては余は唯物論に同意するが、前方に向つては同意しない」と云つてゐるが故である、と云つてゐる。此れよりも尙ほ辛辣にマルクスは一八四五年に批判した「フオイエルバツハは宗教的自己疎隔と云ふ事實、世界を宗教的世界と現實的世界とに二重化することから出發する。彼の勞作は宗教的世をその俗世的基礎に分解することにその本質を有する。彼は此の勞作の完成の後に向ほ爲す可き重要な事があるのを看過してゐる……」、フオイエルバツハは宗教的本質を人間の本質に分析する。然しながら、人間の本質は決して個々の個人に内在する抽象概念ではない。そは、その現實に於いて、社會的關係の總體である……。それ故に、フオイエルバツハは、「宗教的感情」自身は一の社會的所産であり、而して、彼が分析するところの抽象的個人は實際は一定の社會形態に所屬してゐると云ふことを

見逃してゐる」と。此れに適應して、エンゲルスは唯物論的前提から歴史觀に對して生じて來るところの問題を決定して云ふ、「吾々は自然の中に於いてのみでなく、亦人間社會の中に於いても生活してゐる、さうして、此の人間社會もまた、自然と同様に、その發達史及びその科學を有してゐる。問題は即ち、社會に關する科學、換言すれば、所謂歴史的及び哲學的科學の總體を、唯物論的基礎と調和せしめ而して、その基礎の上に立つて改造するといふことである」と。

觀念論的見解に従へば「歴史は無意識に、然しながら、必然性を以て、或る一定の最初から確立してゐる目的に向つて精進する、かくて現實の、未だ知られざる關聯の代りに、或る新しい——意識せられ度いところの又は漸次意識せられて來るところの——神祕的宣託が置かれた。其故、此處では、自然の範圍内に於けると全く同様に此の人工的に作り出される關聯を、現實的關聯を見出すことによつて除去すると云ふことが

要點であつた。即ち、それは結局、人間社會の歴史の中に於いて支配的なるものとして一貫してゐるところの普遍的運動法則を發見すると云ふことに結着するところの一つの任務である。此の着眼點よりすれば、經濟的歴史觀は一の唯物論的歴史觀となる。

如何にして、此處に於いてもまた、同種的前提に出でて同一の目的決定が成立するかを云ふことに注意するのは學ぶべきところが多い。要求せられるところのものは、革命を形而上學的考察の羈絆から解放するところの歴史的思考方法の革命である。この限度に於いて唯物論的歴史觀の要求は、コムトの殆んど時を同じうせる一實證論的社會學の樹立に對して規準を與へたところの諸思想と一致する。

此の普遍的目的決定の同形性は、普遍的哲學的前提そのものが彼處では實證論的な、此處では唯物論的な思考方法を改造に急がしむるのではなくして、寧ろ特殊なる、當時の問題狀態の基礎の中に横たはつてゐる

動機が然らしむるのであると云ふことを認めしめる。マルクス及びエンゲルスは此れを實際また一度も隠したことはなかつた。「社會の歴史の中に於いては行爲者とは、意識を賦與せられたる、熟慮或は熱情を以て行動する、一定の目的を指す人間に外ならぬ。何事と雖も意識せられたる意志なく、意欲せられたる目標なくしては起らない……」然しながら「如何なる原動力が更に此の動機の背後にあるか、如何なる歴史的原因が行爲者の頭腦中に於いて斯くの如き動機と變ずる云かとふ事が更に問題である。」

更に吾々は、此の問題を「古い唯物論は未だかつて提出した事はなかつたと云ふことを學ぶが、それはホツブスに對しては勿論のこと全然不適當であるところの一の假定である。然しながらエンゲルスはマルクスと同様に、殊に「古典的なフランスの唯物論」を考へてゐるのである。此の唯物論は「非歴史的」としてその特質を擧げられてゐる。此の唯物論の非歴史的な自然觀

は「世界を一つの過程として、或る歴史的発展の中に含まれたる一素材として把握する事が出来ない」と云ふ事を以てその本質とする……。此れと同じい非歴史の見解はまた歴史の領域内に於いても適用せられてゐた。「ヘーゲルの觀念論的歴史觀は此點に關しては、これより尙ほ一層深く觀察してゐた。「ヘーゲルは、歴史的に行爲する人間の……動機は決して歴史的出來事の最後の原因ではない、此動機の背後には他の起動的な力が存在すると云ふ事を承認した。」然し彼は、その他の觀念論者と共に、「此れ等の力を歴史そのものの中に尋ねなかつた。」彼は「それを外部から、哲學的觀念體から、歴史の中に向けて喚び起こした。」

唯物論的基礎から經濟的歴史觀を作り出すところの特殊なる誘因は一般に知られてゐるし又マルクス及エングルス自身によつて繰り返し特舉せられてゐる。それは「新しき事實」よりなれる二群及び新しき事實の第一群の精神的映像を包括するところの一群である。

マルクス及びエングルスが他のあらゆる事實に先立つて論及するところの明白なる事實は、經濟的種類のものである。その事實は十九世紀の初頭以來現れはしたが併しながら殊に三十年代以來現れて來たところの勞働者及び雇主間の階級闘争によつて與へられた。この階級闘争は、その決定的基礎を、世界經濟及び世界交易への遷移と、而して、決然として現れて來た自然科學的技術が可能ならしめたところの大資本及び大産業の此の遷移と結び付けられたる發展の中に、最後に、此の發達及び力の過渡と結合せられたる經濟的恐慌の中に有してゐる。更に、此の基礎は、遡つてフランス革命を誘發し、さうしてその經過に對して他の決定的なるものと同時に決定的なるものとして存續してゐたところの經濟的諸條件にまでも及ぶのである。更に唯物論的歴史觀の用語を以て云ふならば、此の新事實の此處に關係を有すべき意識反映を、構成したのはマルクス及びエングルスより以前に存在してゐたところの

フランス及び英國の社會主義的諸理論であり、而して、その理論を研究する事によつて彼等はそれを批判的に分解するまでに至つたのである。コムトが、彼の深く基礎づけられ且つ一貫せる社會學に於いて、此の事實を十分に評價しなかつた、然り、殆ど眞面目に觀察しなかつたと云ふ事情は、マルクス及びエンゲルスがこの偉大なるフランスの實證論者の理論中には同種の目的があるといふことを看過したと云ふ事に對して一つのより廣い内的原因を爲してゐるかの様に見受けられる。斯て吾々はようやく新しき動因の第二群、即ち新しき經濟的事實のその夢想的理論及び治療計畫を以てする最初の未だ不充分なる精神的加工に達した。

かの事實及び此の理論が經濟的に進歩せる西部ヨーロッパに對して、殊にフランス及びイギリスに對して適用せられるとすれば、然らば動因の第三群、即ち第二列目の事實は唯物論的歴史觀に政治的外貌を與へる。マルクス及びエンゲルスは、ヘーゲル學派の左翼

が三十年代の末期以來燦爛たる辨證法の武器を供給したところの、ライン地方の自由主義の區域の出身である。此の政治的基礎の上に經濟的歴史觀の民主主義的特質が生ずる。この特質はトライチケですらそれを描寫するのに、彼の繪具板の上に唯だ暗色の繪具のみを見出したところの吾國に於けるその當時の政治的凋落によつて育まれたのである。此の政治的凋落は、マルクスの如き理論的素質を有する天才を驅つて政治的革命家の陣營に入らしめ、又エンゲルスの如き革命的性質の所有者たる人物を、それが本來の習癖中に固定せしめた。

斯くの如き總てから生ずるものは、單に、マルクス及びエンゲルスの奔放なる激越性のみならず——共產黨宣言は、謂はゞ、マルクスの心臓の血を以て書かれてゐる——、また同様に唯物論的歴史觀の面影の中における一般に重要なる一特質をなすところの實際行動への理論的且つ實踐的宣傳である。「哲學者は世界を

種々に解釋した、然しながら、世界を改變すると云ふ事が問題なのである……。人間の思惟には對象的眞理を得る資格があるかと云ふ問題は、決して理論の問題ではなくして、實踐的な問題である……。フオイエルバツハは抽象的な思惟を以ては満足する事なく、感覺的直觀に訴へる、だが彼は感覺性を、實踐的ではなくして人間的—感覺的—行爲として、把握する。」、斯くマルクスは既に一八四五年に考へてゐた。

經濟的歴史觀は、此等の特殊なる諸誘因から、社會民主主義の觀念的基礎として、或は、好んでさう云ひ度ければ、觀念的反映として、即ち、吾々が既に最初にエンゲルスの言葉に従つてその大體の内容を云ひ表したところの學說として、唯物論の基礎の上に成立するのである。

此の學說は、前記に據れば、經濟的及び政治的事實よりの歸納と、さうして同時に十九世紀の初頭に於ける社會主義的諸理論よりの此の歸納的土臺の上に於ける

批判的演繹である。この學說は、吾々が既に見た様に、そのマルクス及びエンゲルスによつて爲された表現の意義竝にエンゲルスの明白なる説明に従へば、もつと異なるものであるべきである、即ち、社會に關する科學はこの學說を通じて「唯物論的基礎と調和せしめられ、」前者は後者から「再建」せらる可きであるのである。此の事は、經濟的歴史觀は唯物論の必然的推斷、即ち演繹的結果であり、此の結果を認識すると云ふ事は、かの四十年時代の爲に保留せられてあつたと云ふ事を證明してゐる。蓋し、始めて此の時代が、斯くの如き派生の企てに導くを得たところの歸納的基礎を眼前に有してゐたが故である。

然しながら、唯物論は實際、斯かる特殊なる諸斷定、殊に經濟的條件の原則的基本地位を、自分自身の中から派生せしめる使命をもつてゐるものであるのか？

吾々は此の假定を吟味する目的の爲に、暫くの間、

唯物論の見地の上に立たう。唯物論によれば有ゆる精神的過程は吾々の中樞神經系統の組織要素内に於ける運動過程以外の何物でもない。それに應じて、人類の一切の宗教的、藝術的及び科學的活動は、總ての經濟的、法律的及び政治的活動と同じく、全く微分子群の單に現實的なる運動の特殊なる有機的變化に過ぎない。すべての此等の活動は——吾々はそれ等を簡單に文化行爲と呼ぼう——其故、結局は、運動として見れば、同本質のものである。

吾々の歴史的發展の條件を導き出す爲に、此れ等の徹頭徹尾機械的なる行爲の何れかを出發點として取る事は、かゝる前提の下に於いて、先づ第一に方法論的に正當であるか否か？各個の斯かる行爲は、機械的に見れば、勞働、即ち物質的組織的の變化である。各個の斯る行爲は、それ故に、物質的組織體中に於いて、その組織體に働きかけつゝある何等かの運動の基礎の上に成立するところの運動に依存してゐる、即ち、此

等の働きつゝある運動及び物質的組織體の形成に依存してゐる。此處に問題となつてゐる物質的組織とは人間の體軀である。それ故に、若し吾人が、結局は外的であるところの何等かの刺戟を基礎として人間の體内に行はれるところの運動の特殊なる性質を決定せんとするならば、その他の同種の物質的組織體に對する人間の體軀の特性が決定せられねばならない。動物學的に云へば、此の特性は、人間を人間として、人間の次に位する動物的有機體を區別するところの目標によつて、與へられてゐる。此の目標を吾々は周知の如く簡單に直立歩行と大脳、殊に大脳皮質部の他よりも強大なる發達との中に總括しても構はない。此の目標は單に取るに足らない組織的意味を有してゐるに過ぎないと云ふこと、人間には精々最高等生物中の一位、多分單に或る族の地位か、或は單に分族の地位のみしか與へられないと云ふことは、吾々の目的の爲には論ずる必要はない。何故ならば、既述のことから即坐に、

吾々は人間に特有な文化發展の基礎を結局、吾々の原始的生産或は文化行爲中の何れかの中に求むるのではなくして、吾々の組織體の特性、殊に中樞神經系統の構造及び諸作用と、吾人の體軀のその他の組織の此れ等のもと相關せる特質との中に求むべきであると云ふ事が明であるが故である。蓋し、此の解剖學的特質（ヘルデルがその重要性をもつと極端に誇張するを得たところの直立歩行を含む）は、あらゆる心理學的的文化行爲、其故またあらゆる原始的文化行爲を初めて可能ならしめ、且又、此の文化行爲に出發して斯くの如き行爲のあらゆる爾後の錯綜關係を初めて可能となしたところのものであるが故である。

吾々は、初期の發展條件に溯る可き動機を有するところの各個の歴史觀に對して提供せられたる出發點をもつと精確に決定する事が出来る。總ての文化行爲は、吾々が未だ固持してゐるところの、唯物論的、進化史的考察にとつては、先づ第一に吾々の隨意筋肉系統の

反應的運動に歸着する、マルクス及びエンゲルスの所謂觀念的^{イデオロギ}たる、此れに對して現實的と稱せられる事の出来る運動たるとの別なく。蓋し、宗教的意識、藝術的幻想及び科學的思惟の所産と雖も、單に、この所産が不隨意なる或は隨意なる運動、即ち、發聲語的報道の運動、更に文字的固定の何等かの形式の運動、禮拜行爲、藝術的生産の運動、等々に轉置せられる事によつてのみ歴史的に了解し得べき事實となるが故である。すべての此等の、反應的運動は、吾人の筋肉系統の神經分布を必要とする。此の運動は、それが吾々の知覺、記憶、想像、觀念、感情及び、此等のものと共に總稱して、弛緩せられたる意志衝動と呼ぶところの中樞部の運動に適合する範圍内に於いて、吾々の腦髓殊に大腦皮質部中に到達し、而して最後に吾々の感覺機能の興奮を起す。今云つたところの末梢性興奮には、然しながら、人間と動物間に何等の特殊なる差異もない。あらゆる原始的文化行爲の第一次的、生理學

的條件は、其故に、吾々の神経系統の中樞部に於ける、かの興奮によつて弛緩せられたる運動、殊に吾々の大脳皮質部中の運動過程、即ち吾人固有の種々雑多なる、殊に豊富に連結せられたる大脳皮質部の運動である。

經濟的歴史觀は、一切の吾人の文化行爲の此等の本源的解剖學的且つ生理學的諸條件を出發點として取るのではなくして、此等の行爲そのものゝ一を出發點として取るのである。それ故に經濟的歴史觀は普遍的第一次的條件の代りに、自然史的發展の第二次的條件を置くのである。此の事は、歴史の事實が、此等の條件、即ち正に經濟的條件こそ、あらゆる他の條件すらも決定的に優越であると云ふ事を認識せしむる範圍内に於いて歴史的に是認せられる事が出来るのである。然しながら、果して然らば、吾々は、最早唯物論的前提よりの歸結を取扱つてゐるのではなくして、單に歴史的歸納を取扱つてゐるのであると云ふ事になるであらう。

斯くの如き歴史的假定は、然しながら、唯物論的前提より見るも、精神的及び機械的過程の貫通的交通を固執するところの、何等かの心理學的前提より見るも同様に、最初から慎重なる考慮を要するものである。蓋し、吾々は兩者の何れの場合に於いても、經濟的行爲は、唯一の原始的文化行爲であり得ない、従つて、あらゆる其他の文化行爲は、經濟的行爲から發達したものであると見做さねばならないが故である。此の二つの着眼點より見れば、寧ろ、此等の經濟的行爲は、最初から、而してそれに適合して將來に於いても常にまた、單に吾々の文化發展の錯綜せる組織中に於ける絲の中の一列をなすに過ぎないと云ふ事の方が確かな様に見える。蓋し、經濟的文化行爲と同様に、法律的及び政治的竝に宗教的、藝術的及び科學的文化行爲と雖もまた、最初から、吾々人間の器質形成の特有性、殊に吾人の精神的本質の普遍的諸條件、或は吾々

の大脳皮質部の此等と相關關係にあるところの運動の中にその基礎を有してゐるが故である。此れ等の行爲の各々はそれ故に、既に吾々の文化發達の初頭に於いて、あらゆる其の他の行爲との相互作用の中に顯れて來ねばならない、而して原則的に同等なる關聯に於いて此の歴史的發展の總ての爾後の階梯中に持續せられねばならぬ。その際、此の爾後の階梯中に於いては、その時代の特殊なる條件の如何に應じて、或る時には、或る行爲がこれに次いでは、種々に反應を呈し乍ら、その他の行爲の何れかが一時的に優勢となるであらう。

此の事を一々説明するのは、この哲學的研究の任務ではない。唯だ次の様な點に就いて簡單に説く事にする。

經濟的歴史觀が唯物論的前提より見てもまた、如何に偏頗であるかと云ふ事に對する第一の證明はマルクスの説明そのものが示してゐる。マルクスは、その著

「經濟學批判」(一八五九年)の序言の中に於いて云つてゐる、「余の」——ヘーゲルの法律哲學の——「研究は國家形態の法律關係は、それ自身から了解せらるべきものでもなく、また、所謂人間の精神の發展より了解せらるべきものでもなくして、寧ろ、ヘーゲルが、十八世紀のフランス人及びイギリス人の前例に従つて、その總體を「市民的社會」と云ふ名前の下に總括するところの、その物質的生活關係の中に根ざしてるといふ結果、然しながら市民的社會の解剖學は經濟學の中に求むべきであると云ふ結果に到達する」と。此の言葉の最後に於ける説明が、失敗に歸してゐるのは、偶然ではない。寧ろそれは、今しがた、その特質を示されねばならなかつたところの偏頗なる見解の中に根ざしてゐるのである。經濟學は、榮養分、或は吾人の身體組織の爾餘の作用に關する生理學が吾人の身體の解剖學を形成する事が出來ないと同様に、市民的社會の解剖學ではあり得ない。ありとあらゆる生活機能の解

剖學的基礎は、寧ろ、吾々が既に見た様に、當面の問題であるところの物質的有機的組織の外形をなすのである。而して、此の概念的分離は、有機體の構造の認識は其の有機體の個々の構成部分の機能の認識に一般的に依存してゐるといふことによつて、抵觸されはしない。

吾人は此れに對向して、ほかの論ならいざ知らず、次の様な議論を引合に出さうとしてはならない。勿論マルクスは總ての「人間の生産的行爲は人間の器質形成の作用である、而して、各個の斯くの如き作用は、その内容及びその形態が如何様であらうとも、本質的に人間の腦髓、神經、筋肉、感覺器、等々の消費である」と云ふ事を知つてゐる。彼は、彼が或る機會に次の様な事を註釋してゐる以上、彼の唯物論の意味に於いて、半ば日常生活に用ひらるる言葉の意味で云つてゐるのである、即ち曰く、「人間自身は、勞働力の單なる存在として觀察すれば、假令、生ける、自己意識あ

る事物であるとしても、一の自然對象であり、一の事物である、而して勞働そのものはかの力の事物的表示である」と。これと同様に、上に論ぜられたる機能的唯物論の意味に於いて云つてゐる、「勞働力、或は勞働能力の下に吾々は物理的にして精神的(一)なる能力の總體を解し、その能力は人間の身體性、生ける個性の中に存する、而して人間は、その能力を、彼が何等かの種類の使用價值を生産する度毎に、働かしめるのである」と。マルクスは未だ嘗つて全世界が承知してゐるところのものを見落すことは出来なかつた。然しながら、彼もエンゲルスも、生物進化史的に改正せられたる知識から、文化行爲の起源及び關聯の上に出て來るところの推斷を引きはしない。彼等の目は正に理想主義的歴史觀の「政治的、文學的、且又、神學的君主^{II}及び國家^{II}行爲」に對する偏頗なる反動の中にあつて、専ら經濟的生産の上のみ注がれてゐる。加之、進化論は經濟的歴史觀の受容に際しては未だ與る

ことなくして、後に至つて初めて便宜な見せ掛けの證明として、人類の古代史に對する五十年代の諸研究と同様に、採用せられたのである。吾々の次に位する諸有機體から人間にいたるところの、一切の、歴史の彼方に横たはる諸進化條件、即ち合成有機體一般の諸進化條件の特殊なる諸形式はエンゲルス竝にマルクスによつて、その後と雖も全く見落されてゐる。就中、吾々は人間動物間の古き區別と、新らしき經濟的思想との間の一種の奇怪なる妥協を前にしてゐる。古きライプニッツの言葉に従へば人間の行爲の三分の二は動物に等しいと云ふ事情を顧みる事なく、その表現の點に於いてさへアリストテレスの思想を想ひ起させる様な形式に於いて次の如く説明せられてゐる、即ち曰く、「然しながら、下手な建築師でも元來蜜蜂よりは秀れてゐると云ふ理由は彼は、彼が蠟で小屋を作る以前に、彼の頭の中に於いてその小屋を既に建てゝゐると云ふ事である。勞働過程の終りには、その初めに當つ

て既に勞働者の表象の中に、即ち既に觀念的に存在してゐたところの結果が出て來るのである。勞働者は、單に自然物の形態變更を成し遂げるのみではない。彼は自然物の中に、同時に、彼が知つてゐるところの彼の目的を現實化し、この目的は彼の行爲の方法を法則として決定し、而して彼は彼の意志をその目的に従屬せしめねばならない……。活動するところの器官の努力以外に、注意として現れるところの合目的的意志は、勞働の繼續する限り要求せられ、且つ此の意志は、勞働が、その勞働の遂行の固有の内容及び手段方法に由つて勞働者を自己と共に運び去る事の少なければ少ない程、即ち、それ故に、勞働者が勞働の遂行を彼特有な肉體的及び精神的力の遊戯として享樂する事の少なければ少ない程、それ程多分に要求せられる」と。加之、これと殆ど同じ調子で、勞働は、一切の文化發展の唯一の要素として、經濟的生産の意味に解せられてゐる。「勞働は先づ第一に人間と自然との間

一つの過程である、即ち、一つの過程であり、その中に於いて人間は彼の自然との新陳代謝を彼れ自身の行為によつて媒介し、規定し而して抑制する。人間は自然物質そのものに一つの自然力として對向する。人間の身體性に屬する諸自然力、兩腕及び兩脚、頭及び手を人間は、自然物質を或る人間特有の生活に有用なる形態に於いて占有する爲めに、運動せしむる。斯くて此に於いても亦、ダーウインの假説の形式に於ける進化論的思想の影響は全く缺けてゐる、況んや、人間が、その器質形成の爲に進化假説の意味で云ふならば「特殊なる文化動物となつた以上、人間に對して決定的であるところの、特殊なる事情を顧慮せる、批判的展開の何等かの企に於いてをや。經濟的思想行程を嚮導するところのものは、進化思想ではなくして、唯物論的—生理學的諸假定である、即ち、「勞働は、その物質的要素、その對象及びその手段を消費し、それ等のものを消耗し盡し、而して斯るが故に消費過程であ

る。此の生産的消費が個人的消費と區別せらるゝ所以は、後者は生ける個人の生活資料として生産物を、前者は生産物を勞働の生活資料として、即ち個人の活動しつゝある勞働力の生活資料として消費すると云ふ事にある。

吾々は、唯物論的前提よりの演繹が、常に吾々がそれを見出す事を期待してゐるべき所に、缺けてゐるのを見る。何故ならば、全然或は半ば唯物論的なる説明は、心理學的思想行程との適合と混合せられては、決して演繹的證明ではないからである。

エンゲルスは、ダーウインの進化假説に適合せんが爲めに彼の遺稿中に於いてもつと先の方にすら行つてゐた。彼にとつては、勞働は、猿より人間に至る人間の遷移に對する、本質的進化條件となつてゐる。必要が人間の器官を作り出した。先づ第一に勞働、而してそれから勞働と共に言語——それは勿論報道の必要としてとあつて、言ひ表された思想として解せられた

るものではない——、これが二つの最も本質的な誘因であつて、此の誘因の影響の下に猿の脳髓は、それと非常によく類似してゐるにも拘らず遙により偉大な人間の脳髓へと漸次遷移して行つた！」

若し吾々が經濟的歴史觀の結果を、マルクスの有名なる、一目瞭然たる表現を以て、直接對照するならばそれは多分、上記の一般的歴史觀と特殊なる經濟的歴史觀との區別を決定するのに、最も簡單な、而して最も明白な形式である。一般的見解の諸推斷が、他との關係を付けようとするが爲めに、それらが上記せるところに依つて意味せられてゐるよりも機械的に言ひ表されてゐると云ふ事は問題の本質に何等の關係をも及ぼさない。

「人間は、彼等の生活の社會的生産の中に於いて、一定の、必然的な、彼等の意志より獨立せる

關係を許容する、彼等の物質的生産力の或る一定の發達階程に適合する生産關係これである。」

「此等の生産關係の總體は社會の經濟的構造、即ち、法律的及び政治的上層建築がその上に打ち、而して一定の社會的意識形態がそれに適合するところの現實の基礎を形成する。」

人間は彼等の生活の社會的發達の中に於いて一定の因果的に制限せられたる、彼等の意志より往

々にして獨立せる關係を許容する、即ち、彼等の文化力の或る一定の發達階程に相應する文化關係これである。

此等の文化行爲の總體は生理學的にして病理學的なる過程を構成し、この過程の現實の基礎は人間の組織の解剖學的構造、殊にその神經系統である。此の構造上の基礎の上にかの凡ての行爲、即ち、宗教的、藝術的及び科學的、並に、經濟的、政治的及び法律的行爲が起る。

「物質的生活の生産方法は社會的、政治的及び精神的な生活過程一般を條件付ける。」

「人間の實在を決定するのは人間の意識ではなくして、その逆に人間の意識を決定するのは人間の社會的實在である。」

蓋し、かの構造との一掃的な法則的相關に於いて人間に特有なるところの精神的生活過程は、有らゆる此等の特殊なる諸行爲を、結局は同等なる意味に於いて條件付けるが故である。

斯くて吾々の社會的實在を、その有らゆる活動及び此の活動から生ずる形態に於いて條件付けるものは、此等の吾々固有の精神的生活過程、簡單に言へば、人間の意識の固有性である。

經濟的歴史觀の偏重性を明かにする第二の要素は、

或る屢々なされたる反對論の中に横たはつてゐる。一の因果的假定の妥當性に關する試験は、進歩する經驗によつて爲されるところの證明である。此處は、四十年代以後の經濟的發展の實際上の經過は、マルクスが殊に共產黨宣言の中に於いて、明説したる豫言を如何なる範圍に於いて破つたかを、論すべき場所ではない。斯かる豫言の失敗は差して重要な事ではない、然しながら、徹底せる歴史的證明による試験は成功せねばならない筈である。斯かる種類の試験は、一時代の歴史的關係を明かにするが爲めに吾々が充分なる資料を有してゐる場合に、その關係は此の時代の經濟的條件から立派に派出せられると云ふ事、及び如何にして派出せられるかと云ふ事を證明すれば、それで宜しい筈である。而して、その時代の精神的要素に對する斯くの如き派出に成功するところの試験は殊に卓拔なるものであるべきである。然しながら、此の種の證明力ある企圖は社會主義的文獻中に於いても、また最近補

充續出してきた文獻中の何れの中に於いても爲されてはゐない。而して、此の企圖は如何にして成功し得るかと云ふ事は、上記せるところに據れば、また豫知せらるることは出来ない。それを豫知するに充分なる歴史的個別研究は現存せる何れの萌芽中にも缺けてゐる。特にマルクス及びエンゲルスによつて提出せられたるところのものは證明力あるものと云はれる事は出来ない。

彼等の歴史的の研究は、經濟的觀察の思想が一度把握せられた以後に於いては、大體に於いて演繹的經過を取つた、即ち、それは「一度獲得せらるゝや、彼等の研究の嚮導線として役立つ」たのである。加之、法律的及び經濟的發展の關聯に對しては、何れの證明的企圖も內的に實行不可能であると云ふ事が保證せられてゐる、即ち、的確なる、マルクス主義の陣營に出發してすら是認せられたる斷定を以て、ルードルフ・シュタムラーは此の事を「經濟と法律」に關する彼の名著の

中に於いて、形式的思想行程の立場から説いてゐる。斯くて經濟的觀察は偏頗にして且つ不充分なる基礎を有するものである。それは、此れとは比較にならぬ程豐富なる哲學的手段を以てではあるが然しながら全然不充分なる經濟的手段を以て企てられたところのコムトの實證社會學に於ける、同様に偏頗なる主知論的歴史觀に對する一對照である。

加之、假令經濟的歴史觀は此處に説くよりも、より的確なるものであるとしても、上記の思料によれば、經濟的歴史觀の「唯物論的前提との調和」は、マルクス及びエンゲルスが得んとして努力した意味に於いては、作り出されてはゐないと云ふ事は確實であるべき筈である。此の前提は、經濟的見解が推斷としてそれから導き出され得るところの實質的基礎ではない、それ故にまた、新しき歴史觀がその上に再造せられたところの土臺でもない。二つの學說を一の總體に合併するのは、論理的に言へば、決して客觀的共屬性ではなく

して、主觀的共屬である。原因及び結果の內的關聯ではなくして、竝立存在の外的關聯である。心理學的には、吾々は、次の如く言ふ事が出来る、即ち、この二つの學說を一の總體に編み合せたところのものは、一の聯想的關聯、而も、屢々論ぜられたる論法を用ひて言ふならば、マルクス及びエンゲルスにとつては、彼等の思想が展開せられたる時代の趨勢の爲め、「解くべからざる聯想」であると。

唯物論的前提より生ずる內的推斷は、之れに反し、經濟的歴史觀を唯物論的なるものとして提示するところの第三の要素である。因果律から見れば、吾々は、歴史的出來事に對しても亦、原因及び結果の徹底的關聯を要求せねばならぬと云ふ結論に到達する。

此の因果的法則性の事實上の是認は大體に於いて歴史編纂と同様に古い。唯だ、吾人は、超自然的な力、即ち鬼神や奇蹟への避難は、此の是認を放棄するのではなくして單に、作用しつゝある原因の一部分のみを

超自然的な區域に移すのであると云ふ事に注意せねばならないのみである。意志自由の人間意思絕對自由論的形式ですら、大抵は唯だ「靈」には、本來の意志行為に關しては、自發性、即ち自立せる、外的刺戟より獨立せる因果性が適用せられると云ふ様に解せられてゐた。因果的、歴史的法則性の理論的承認及び概念的決定は、かくの如き限定に對する萌芽は既に自然法的諸學說の諸前提の中に含まれてゐるにも拘らず、勿論のこと、遅れて現れて來た。何の程度まで完全にかゝる承認及び決定が、ホッブス以後の仲介は之れを措いて、カントの歴史觀を支配したかに就いては、何等の説明をも要しないであらう。

これと同様に、ヘーゲルの法律哲學、殊にその最後の諸章、竝に歴史哲學に關する講義に對する序說中に於ける諸々の議論を一寸想ひ起したのみでも、斯かる承認及び決定が謂はゞ此の「觀念論的」歴史觀の靈であつたと云ふ事を自覺するのに充分であらう。又、唯

物論的歴史觀には、歴史的法則性の承認が、此の源泉より、特に流れ込んだと云ふ事は自から明かである。其故唯物論的歴史觀を、「社會的發展の法則性に關する」學說と同一視し、或は後者を、單に、かの歴史觀の獨特なる目標としてのみすら見ると云ふことは、この事は屢々行はれたには相違ないが、全然誤りである。それは、寧ろ、マルクス及びエンゲルスが唯物論的意義に於いて其れに與へたところの改造を経て初めて、かゝる特徴となるのである。歴史の「運動」と云ふ言葉は自明であると同様に古い。ヘーゲルも亦歴史の中に於ける「運動」に就いて語つてゐる。然しながら彼は其れを以て廣義に於ける運動を意味し、その意味は「Kinesis」(運動)と云ふアリストテレスの語法の中に置かれ而してカント以後のドイツ哲學中に於いて、殊にヘーゲル自身によつて、辨證法的(論理的)形而上學的)に改造せられてゐる。マルクス及びエンゲルスにとつては、此れに反して、彼等が歴史の「運動法

則」を論題とする以上、その主旨は此れとは異つてゐる。彼等は最早殆んど證明を要しないところの唯物論的前提の歸結の中に於いて、本來の意味に於ける運動、即ち、所在變更としての運動を意味してゐるのである。

此の意味に於いて、「新しき歴史觀の任務は、」結局「人間の社會の歴史に於いて支配的なるものとして施行せらるゝ所の、普遍的運動法則を發見すると云ふ」ことに「歸着する。」此の意味に於いて、「近世の唯物論は、從來のそれに對立して、」歴史の中に、人類の進化行程を認め、その行程の運動法則を見出すのが近世唯物論の任務である。」

此處に於いても亦確に「內的な、普遍的な、」或は「內的な、潜在せる」法則が問題になつてゐる。然しながら、此の法則は、吾人の頭の中に於ける運動に關する法則としてのみ內的なものであり、而して偶然が外見上歴史的出來事の表面に追ひやるところの變化に對し

てのみ潜在せるものである。マルクスの種々様々に變換せられたる論法轉換は此れと同じ意味に解せられねばならぬ。彼は「近世社會の經濟的運動法則を暴露する事を」彼の主著の「最後の最終目的であると言つてゐる。彼は、標準労働時間の爲の論争の批判中に於いて兒童労働の統制に關する精細なる規定を、「近世生産方法の自然法である」と論じてゐる。資本の流通行程に關する章に於いて、彼は、工業資本は生産の資本主義的特徴を條件付けると説いてゐる、その際、次の様に云はれてゐる、即ち、「この工業資本より以前に現れたる資本のその他の種類は、工業資本に所屬せしめられ、而して、その職能の機構に於いて工業資本に順應して變化せられるのみならず、單にその基礎の上に於いてのみ動いてゐる」と。これよりも原則的なのはブルドーンに反對する著書の中に於ける説明である、曰く「經濟學者は、如何にして與へられたる状態の下に生産せられるかを、吾人に説明する。然しながら

ら、彼等が吾々に説明しないところのものは、如何にして此の状態そのものが生産せられるかと云ふ事、即ち、此の状態を生かし出すところの歷史的運動である」と。此れに應じて彼は尙彼の主著の終冊に於いて、「肉眼で見得る、單に現れたる運動を、內的、現實的運動に還元すると云ふ事は、科學の一つの仕事」であると言つてゐる。此處に於いても亦、唯物論的背景が明かに現れて來ればくる程、奇怪な感じを與へるのは、彼が彼の經驗論と而して歸納法の主張にも拘らず、分業の影響が現れて來る場合に伴はれるところの「壓服的自然必然性」に就いて語り、或は同様な關聯に於いて自然法の「破るべからざる權威」に關し述べ、或は、最後に、「資本主義的生産の自然法則を……堅固なる必然性を以て作用し而して自己を貫徹するところの傾向」と呼ぶところの論法である！

斯くて、唯物論的歴史觀の特徴は、歷史的發展は法的なるものであると云ふ認知ではなくして、狹義に

於ける機械的或は運動的キネティック法則性としての此の法則性の解釋である。

此の推斷は、既に他の人々によつて述べられたるが如く、勿論亦科學的に論ぜられたるものでもない。吾人は、エンゲルスに於いてすらも、此等の「發展法則」の普遍的機械的法則に對する關係に關して何事をも體驗しもしなければ、この發展法則そのものは、その成立及びその作用に於いて、「動的原因」としてより精密に決定せられてもゐない。此の點を明かにせんとする試みに際して、常に企てられねばならない最初のもの、即ち、吾々は如何なる意味に於いて、發展法則を認容すればいゝのかと云ふことを決定せんとすることに對しては、何等の萌芽すら存在してはゐない。此の思想の踏襲は寧ろ、略々模寫説の踏襲などと同様に自明のものである。マルクスに於いても亦、彼の「資本論」は、近世資本主義の發展法則を見出さんとする一つの試みとして解せられても宜しいにも拘らず、徹頭徹尾、

斯る方法論的な議論が缺けてゐる。

B 經驗論よりの

唯物論的前提よりの此の眞の歸結及びその以前に論ぜられたる外觀上の歸結のほかに、第三の既に論ぜられたる普遍的、哲學的前提よりの、即ち經驗論よりの歸結がある。マルクスは經驗の全能に關する學説を或點に於いて變更した、彼は、吾々が見た様に、彼の社會主義に關する暗示をこの學説の中に見出したのである。あらゆる理論の結果彼に與へられねばならないところの實地上の轉向の意味に於いて、彼は既に以前に意見を吐いたことがある。「人間は境遇及教育の所産であり、變化せられたる人間は、それ故に、異なる境遇及變更せられたる教育の所産であるといふ唯物論的學説は境遇は正さしく人間によつて變更せられるといふこと、竝に教育者自身が教育せられねばならない……といふことを忘れてゐる。境遇と人間の行爲との變

化の合致は單に變革する實地としてのみ把握せられ且、合理的に了解せられることが出来る」と。エンゲルスが或機會に示したところは根本に於いて論題の變轉に過ぎない、即ち「人間を動かす總てのものは人間の頭の中を経ねばならない、然しながら、それが如何なる形態を頭の中でとるか」と云ふ事は境遇と密接なる關係を有する」と。こゝに問題となつてゐる社會的推斷は同時に普遍的社會的法則の假定に依存せる思想の中に存在してゐる。經驗論的前提からは、この前提が甚しく嚴格に固持せられる以上、人間は單に經驗が人間から作り出すところのものとなるのみであると云ふ結果となるであらう。蓋し人間は境遇を實踐的に變化する爲に彼等がなすところのものゝ中に於いてもまた、結局は排他的に經驗に隸屬してゐるが故である。然しながら、エンゲルスと雖もそれ程遠く行きはしない。現れて来るのは推斷の半分である、即ち「歴史的に行動する人間の動因の背後にあり、さうして歴史の

本來の最後の動力を形成するところの原動力を」——即ち起動的にして又被動的ですらある法則的過程を——「研究するのが眼目であるならば、然らば假令尙ほ如何に優秀なる人間の場合に於ける動機と雖も個々の場合に於ける動機ではなく、それよりも大衆を、全國民を、及び各個の國民内に於いては更に一切の國民階級を動かすところの動機が問題である……こゝに行動する大衆及びその指導者の——所謂偉人の——頭の中において意識的動因として……反映するところの原動的原因を解明すると云ふこと、それは、吾々を、總括せる歴史並に個々の時代々々及び國々に於ける歴史を支配する法則そのものゝ足跡の上に導くことの出来る唯一の道である」と。吾々はこの目的は凡そコムト及びカーライルなどに於ける英雄崇拜より遙かに遠ざかれる觀察の方法をもつてゐると云ふことを認めはする。

然しながら、吾々は既述の二つの前提に出でて斯く

の如き目的を立てる理由を與へるところの根據を了解しはしない。こゝでもまた前提があまりに普遍的すぎる。蓋し、普遍的、機械的、因果的法則性の假定も、個人の經驗的發展の假定も、指導者としての役目を唯だ群衆の動力にのみ負ふところの單に「所謂」偉人と云ふ假設に對して何等の理由をも與へないが故である。これに反して、絶對的經驗論を棄て、これを、實際マルクス及びエンゲルスの爲すが如くに、各個々人の特殊なる天賦に制限するならば、然らば、各個々人を歴史的大衆の結局は單に物質的なる組織の中に於ける各個のその他の個人と同等なる位置に置かれたる一つの點となすところの根據は何處にあるのであるか？またしても、思想嚮導の中に於いて行はるゝのは、斯くて普遍的前提ではなくして、特殊なる歸納である。過激なる時代思潮の民主主義的特質及びこの時代思潮より發せる希望が此の思想の父である。本來の平等思想が半ば固持せられてゐるが爲に生じた政治的

推斷の有様もまた此れと異なるものではない。たゞ嚴格なる經驗論のみが人間としての一切の人間の平等に導く。各個の制限は種々の職業の豫め形成せられたる發展に對して條件を付し、歴史的發展の普遍的法則に従へば、團結せんとする「運動の衝動」がこれ等の職業の内に存在し、また此等の職業は宗教的、經濟的及び政治的發展の決定的諸條件のもとに於いて、或時にはこの條件の、或時には他の條件の優勢のもとに、身分、階級並にあらゆる種類のより特殊なる資本主義的結社を起こさせ、この諸結社の形態は慣習或は法規を通じて多少の差こそあれ、法律的に固定し得るものである。それ故、マルクス及びエンゲルスの身分及び階級の發達に關する議論の中にも、幾多の歴史的及び實質的に正鵠を得たるところがあるには相異ないが、それでも彼等の經驗論的前提から見て、相等しき社會的及び政治的資格を各人の爲に要求するところの命題の證明は甚だ貧弱である。有らゆる人間は人間として

共通なるあるものを有し、さうして此の共通なるものの届く限りに於いて平等である」と云ふ事は自ら明かである。然しながら、「人間であると云ふ事のかの共有の特質から、人間としての人間の斯の平等性から、總ての人間、或は少なくとも(！)一國の全市民、或は一社會の有らゆる成員の平等なる政治的或は社會的資格に對する要求を導き出さしむる「近世の平等要求」を保證するが爲には、かの平等は如何なる程度まで達するかと云ふ必然的な明確な限定が缺けてゐる。この事は、吾々がより詳細なる經濟的語法をとるならば、尙一層明かになる、即ち、「平等は單に外觀的であつてはならぬ、平等はまた現實に、社會的、經濟的領域内においてもまた貫徹せられねばならぬ……。かくて平等要求の眞實の内容は階級」即ち結局は「賃銀労働者、資本家及び地主」間の差別の「除去の要求となる。」

(四) 辨證的方法

今まで論ぜられた三つの假定、即ち形而上學的模寫說、この模寫說を内容的に尙一層精確に決定する唯物論、及びこの模寫說を發生的に尙一層精確に限定する經驗論の中に、吾々は唯物論的歴史觀の普遍的、實質的、哲學的諸前提の範圍が一丸となつて獨立體をなしてゐるのを見出す。歴史觀の經濟的及び政治的成立に對する此れ以外の外觀上の或は實際上の原則的推斷はなされてはゐない。

然しながら、まだ普遍的、方法的假定が残つてゐる、此の假定を通じて社會的發展の經濟的諸要素の成立は決定せられ、さうしてその歴史的作用は導き出されるのである。エンゲルスの意味に於いては此の方法論的假定は特に哲學的なるものである、即ち、この假定

に關する知識は、歴史科學でさへ「實證的」となつて了つた以後に於いて尙ほ哲學から殘存してゐるものを含んでゐる。

マルクス自身は彼の方法を「辨證的」なものとして稱した、さうして其れが爲めに語法に於いてもまたヘーゲル流の概念構成の方法を偲ばせた。だが彼は同時に、彼の辨證法的方法はヘーゲルの方法に對する「正反對」であると説いてゐる。この事は二重の關係に於いて的中してゐる。第一の反對は兩者の思索方法の形而上學的前提の中にある。「ヘーゲルにとつては、」とマルクスは言つてゐる。「彼が其れを理念イデアと云ふ名前のもとに於いてすら一の自立せる主觀に變ずるところの思索行程は現實なるもの、造物主であり、此の現實なるものは單に、素思行程の外的現象を構成するに過ぎない。余に於いては此の反對に、理念的なるものは、人間の頭の中に——「即ち他の運動の中に——「置き換へられさうして翻譯せられた物質的なるもの以外の

何ものでもない。「吾々は此の註釋を付け加へる。何故ならば、吾々は、運動は「物質の、即ち現實なるもの實在の方法であり、而して生命は運動、即ち「蛋白質の」實在の方法であると云ふことを想ひ出すからである。かくて、一切の歴史的發展もまた單に種々なる運動の一つの錯綜、即ち吾人の身體に對して外的なる、實在の運動と、かの外的運動によつて吾人の中に刻み込まれさうしてそれを反映するところの、人間の頭腦の中に於ける内的運動との錯綜にすぎない。このほかに第二の反對がある。ヘーゲルにとつては絶對的なるもの、發展、彼の言葉で言へば、「概念の自己運動」は、時間的なるものではなくして論理的なるものであり、これは不變なる形而上學的規範に従つて生じ、さうして哲學によつて先驗的な、經驗より獨立せる方法に於いて把握せられる。マルクス及びエンゲルスにとつては、現實なるもの、發展はこれに反し一の時間的にして機械的なるものとなり、その反映的概念

構成は經驗に依存し、而して經驗と共に變化する、從つて唯だ歸納的にのみ獲得せらるゝことができ、而して妥當である。然しながら、マルクスと雖も決して到る處でヘーゲルの表現方法に對して「媚態を示し」しはしなかつた。新しき歴史科學の方法はまさしく同様に辨證法的であるべきである。しかも、此の方法に従へば、論理的意味に於ける矛盾ではなくして、現實的意味に於ける反對が歴史的發展に對する基本條件なのである。吾々はこれを證明する爲に「資本主義的私有財産は、個人的な、自己固有の勞働の上に基礎を有する私有財産の最初の否定であり、而して資本主義的生産は自然過程の有する必然性を以て資本主義的生産そのものゝ否定、換言すれば、「否定の否定、」即ち「資本主義的時代の獲得物、即ち世界と勞働そのものによつて生産せられたる生産手段との協力及び共有の基礎の上に立てる個人的財産」を作り出すと云ふ、「資本論」第一卷中に於ける屢々論ぜられたる解説を引證する迄

唯物論的歴史觀の哲學的諸前提

もない。何故ならば吾々は基本的著書「經濟學批判」(及び共產黨宣言)の思索行程から次の様な事を學ぶが故である、即ち曰く「社會の物質的生産力は、その一定の發展の階程に於いて、社會の生産力が從來その内部で動いてゐたところの所有關係と衝突する。此等の關係は、生産力の發展形態からそのものゝ桎梏にと急變する」と。吾々は、同一の、「資本論」第三卷中に於いても尙ほ生々と流れ出でるところの源から次の様な事を知る、即ち「市民的生産關係は社會的生產過程の最後の反抗的形態である……然しながら市民社會の懷に於いて發達する生産力は同時に此等の反抗の解決に對する物質的條件を創造する」と。

ヘーゲルの辨證法思想嚮導と歸納法との此の奇怪なる組合はせはエンゲルスによつて尙一層原則的に、さうしてより強くヘーゲルに依頼して形成せられた。エンゲルスは、彼の言葉を以て言へば、至極熱心に、「意識せられた辨證法を自然の唯物論的見解に於いて

も救ひ揚げ」ようとする試をなす！。彼は次の様な事を主張するまで先の方に行く、即ち「自然は辨證法に對する試鍊であり、さうして吾々は近世の自然科学は此の試鍊に對して非常に富豊なる、日々に累積するところの材料を供給しさうしてそれと共に、自然は窮極に於いて辨證法的に動いてゐるのであつて形而上學的に動いてゐるのではない」と云ふ事を證明したのであると云はねばならぬ！」と。

ツエノ的辨證法を以て彼はヘーゲルを手本として言つてゐる。「運動は自身一の矛盾である、既に單純なる機械的地位移動ですら——恰も機械的自然觀、及びあまつさへ唯物論に對してすら、此と異なる見解があることができ、而して、エンゲルスあるが故に在るが如く——「單に、一の物體が同一の瞬間に於いて一の地位に、さうして同時に他の地位にあり、同一の地位にあり、さうして同時にその地位にはないといふことによつてのみ行はれることができる。而して、此の

矛盾の繼續的發生及び、同時的消滅が即ち運動である」と。吾々はエンゲルスの特殊なる論說中に、「唯物論的に基礎を置きかへられたる」シエリング的及びヘーゲル的自然哲學の精神に適合するところの數學及び自然科学の解釋をすら見出す。マルクスの否定學說ネガチオンスレーレ及びマルクスの唯に量的變化も或る一定の點に至れば質的差異に變ずると云ふヘーゲルの命題の引證を辯護するに熱心なあまり、エンゲルスは何等の躊躇することなく、説く「任意の代數學的量、即ち a を假定する。これを否定しよう、さうすれば $-a$ が出てくる。若し吾々がこの否定を $-a$ に $-a$ を乗ずることによつて否定するならば、さうすれば吾々は $+a$ 、即ち本來の積極的な量ではあるが、それよりも高い階程にある、即ち第二幕における量をうる。

吾々は吾々が積極的な a をそれ自身を以て乗じ、かくして a^2 をうるといふことによつて前と同じ a をうるものが出來るといふことは、此處においてもまた

何等の關係もない。何故ならば、否定せられたる否定はどのみち二つの平方根、即ち \pm 及び $\sqrt{-1}$ を有してゐる程しつかりと α の中にあるからである！」と。さうして此れと同じく吾々は次の様な事を近世自然科学の結果であるとしてエンゲルスから學ぶ、即ち、「全地質學は否定せられたる否定の一系列であり、その意味は、「古い岩石系統の連続的破壊及び新しき岩石系統の堆積一系列である……然しながら、結果は非常に積極的なものである、即ち最も多數にして最も多種なる植物の發生を許すところの機械的粉碎化の状態に於ける種々雑多極まりなき化學的要素より混成せられたる土壤の生産である」と云ふのであり、更に、既に成育せる植物は種子の否定であり、枯死する植物は成熟せる植物の否定である、此の否定の否定の否定として、吾々は再び元の種子ではあるが、然しながら増殖せられた、而して事情によつては之よりも質の善くなつた等々の種子をもつと。此の自然 \parallel 及び歴史觀が如何に深くへ

ーゲルの形而上學の地盤に根を下ろしてゐるかを示す爲には此れ以上の説述は不要である。加之、若しも吾々がファイヒテ及びシヨーペンハウエルなどの此れ以上の隸屬關係を求むるならば、それは歴史的理解を妨げるものである。ファイヒテ流の思想と似てゐる點をマルクス及びエンゲルスに見出さしむるところのものは、此等の思想がヘーゲルの學說の中に尙、影響してゐるが故である。人々はカント及びファイヒテを並び稱するところのエンゲルスが或機會に云つたことのある言葉を重要視するが、この言葉は吾々がたゞ單にファイヒテのみの學說を直接に参照したのではそんな重要さをもつてはゐないのである。最後にシヨーペンハウエルの學說と少しばかり類似してゐる所以は、シヨーペンハウエルの哲學は、單にカント流の意志至高の一つの形式であり、此の意志至高をまたファイヒテ、シエリング及びヘーゲルも、カント流の基礎の上において形而上學的に改造したが故である。

(五) より特殊なる諸特質

A 宗教的特質

かく論じて來て、なほ残つてゐるのは、その實質的内容及び歴史的地位が決定せられねばならない筈であるところの唯物論的歴史觀のより特殊なる諸要素である、即ち特に宗教的意識並に經濟的發展の倫理的「隨伴現象」の解釋である。然しながら、此等のエンゲルスによつても亦マルクスによつても同様に、唯その輪廓を畫かれてゐるに過ぎない諸特質は、全景には何等本質的なる變化をも及ぼしてゐない。

宗教的意識の批評に對する目立した論文をマルクス及びエンゲルスは書いてはゐない。斯くの如き批評は

彼等の興味以外にあつた。原則的には彼等はフオイエルバツハの「宗教的世界の現世的、人間的基礎への分解に」同意する。然しながら、この宗教的意識の人間の抽象的本質への還元は、マルクスに従へば、「宗教的情操自身は一の社會的所産であるといふこと」を見落してゐる。さうして、エンゲルスの指摘するところによれば、フオイエルバツハの欲するのは「決して宗教をなくしてしまふことではない……。哲學自身が宗教の中に融け込むべきであるのである」宗教は寧ろ、「それが物質的生活と最も遠く離れて立ち、さうして最も縁遠いものゝ様に見えるにも拘らず、人間の物質的生活條件の中に……」その根を下ろしてゐる。此の「森林起源的」なる觀念體の發展もまた唯だ外觀上のみ思想資料の傳承に、即ち、「自立せる、獨立的に發展する、唯だ自己固有の法則にのみ従ふところの實在としての思想の研究」に懸つてゐる。實際に於いては、此の思想行程の發達の「經過をもまた結局決定するの

は、人間の物質的生活條件であり、此の経過はこの人間の頭の中で行はれるのである、假令かういふ事は此の人間には必然的に意識されないでしまふとしても。何者なれば、若しさうでないならば、觀念體イデオロギなどと云ふものはなくなるであらうからである。「吾々が、更にエンゲルスから聞くところによれば、キリスト教の發展は、此の事に適合する。それは、元來、「時勢に適應した宗教」であつた。「それが紀元第三世紀以來國教となつた時には、それは依然としてさういふ宗教のまゝであつた。——封建的教政は中世の封建制度に適合する。而して、町民階級が現れてきた時には、封建的カトリック教に對抗して、プロテスタント異教が發達した。其故、宗教的資料と共に生ずる變化は、階級關係から、即ち、此れ等の變化を企てる人間の經濟的境遇から發生する。」フランス革命の行はれつゝある間に、「キリスト教は、その最後の階程に這入つて行つた。キリスト教は、爾來何等かの進歩的階級にとつて、そ

の階級の努力の觀念的な扮裝として役立つ事が出来なくなつた。それは愈々益々支配階級の獨占となり、而して此の支配階級は、それ以下の階級を制禦する爲めに、キリスト教を單なる統治手段として利用する。」此れ等の引用文が吾々に語るところは、あの古い、マキヤベリ及びホツプスによつて、特に言ひ表されたる、公認せられたる迷信としての宗教に關する思想である。此の思想は、唯物論が、即ち、科學的見解が勝利を得るに従つて、消え失せるこれは當然の歸結である。煽動的理由からして、宗教、即ち、「鍊金術」に對する此の對照は、私事であると云ふ合詞が行はるゝのである。

B 倫理的特質

マルクス及びエンゲルスが倫理問題を論じたのは此れよりも尙ほ少なかつた。況んや此れを組織的に説くなどは問題外である。既に従つて、「人間は、意識的

にしろ無意識にしろ、自分の階級状態の基礎であるところの、實踐的境遇から——人間がその中で生産し且交換するところの經濟的還境から、自分の道德的見解を汲み取る」と云ふ事は、自ら明かである。近世社會の封建貴族政治の中に於けるキリスト教的に封建的の殘滓に對抗して町民的道德及びプロレタリアの道德が現れて來た。歴史と云ふものが始まつて以來道德は階級道德であり、且あつた。道德は支配階級の支配及び利害を擁護するか、さもなれば、それは此の支配に對する叛逆と被壓者……の將來の利害とを代表するかである……。階級對抗の上やこれに關する記憶の上立つ、實際に人間的な道德と云ふものは、階級對抗を單に征服するのみならずまた生活の實地に對しても忘れてしまつたところの社會階程に於いて初めて可能である。此の着眼點より見れば町民的家族の分解や、婦人の地位や教育に關する共產黨宣言の意見は了解せ

られねばならぬ。其故、重要なことは、また此處に於いても倫理的關係を、經濟的關係の獨占的映像であると思ふ企である。然しながら、總ての道德の此の經濟的に基礎づけられたる相對性の關聯から生ずる道德的要求の中には、非社會主義的或は非共產主義的倫理をもまた、即ちマルクス及びエンゲルスの所謂觀念論者の倫理をもまた、代表したこのある思想が含まれてゐると云ふ事が指摘せられねばならぬ。であるから、唯物論的歴史觀の最近の發展段階に於いて、カント化する社會主義者、及び社會主義的カント主義者が、此の問題に對しても亦、カントを引合に出し始めたと云ふ事が可能となつたのである。

一般倫理學の種々様々な體系に對する、探せば幾らでも見出されるところの此の實質的な類似をカントと歴史的に結び付けると云ふ事は、試みない方が好いのである。

C 未來の社會

一切の階級差別が消滅すべき未來の社會と云ふ思想の中には、他の哲學的學說に對する單に實質的なる類似以上のものが存在してゐる。

一見したところでは、勿論、共產主義的理想社會の國際的民主主義的平等とヘーゲルの國民的獨裁君主制警察國との間には、殆んど、此れ以上の大きな反對は考へられないかのやうに思はれる。此の反對は明白である。ヘーゲルに於いては、經濟的關係は、論理的に見れば、國家を前提してゐる、だから、此處では、國家は、市民社會の政治的經濟をその因果的基礎としてゐる。彼處にあつては國家が、即ち「絶對的、非被動的自己目的」であるが、此處に於いては、國家が「死滅し」盡して了つた未來の社會は、人間に對する相對的な、單に歴史の運動によつてのみ達し得らるゝ目的となつてゐる。彼處に於いては、國家は、「世界の中に存在し且

つ世界の中に意識を以て自己を實在化する精神」であるが、こゝでは、國家は、人間性の物質性であり、この物質性の機械的反映が意識である。ヘーゲルにとつては、國家の觀念は、現實の神であり、マルクスに於いては、フオイエルバツハ流の思想に適合して、眞のその終局の物質性の中に於いて反映せられたる人間である。だが、兩極はこゝに於いてもまた、相觸れてゐる。各人の意識的となれる利害を未來に向つて要求するであらう社會は、此の利害を社會の中に於いて、實在化せんと欲する者を、ヘーゲルの場合に於けるが如く、國家はその觀念に従へば自由の現實化、道德的總體であると云ふ、その國家に比して劣ることなく絶對的に、有らゆる人々の利害と結び付ける。國家全能の思想は、その内容、及びその證明が反對のものに變つて了つてゐるにも拘らず、尙ほ保たれてゐる、これは恰も形而上學的模寫説が、彼處に於いても亦、解釋や證明がその反對に觀念論から唯物論に、唯理論から經驗論に變つ

てしまつたにも拘らず、存立してゐたと同じ事である。まだある。此の夢想郷に於いては、現在の代りに、階級と共に階級道徳がなくなつてしまふであらうし、この夢想郷では、人類の經濟的生産の中に置かれた目的は、人間性の利己的諸衝動が許す限りに於いて達せられるであらう。假りに、未來の、共產主義的に組織せられたる社會の肢體の內的諸衝動を、道徳的なるものであると見做すのは正當であるとしよう、然らば、此の社會は、吾々にとつて達し得らるゝところの道徳的絶頂にある人類を示すであらう。其故、此の社會はまた道徳性の權化でもある。尙もつと甚だしく觀念論の言葉に返つて言ふならば、さうすれば、その結果觀念論はそのあらゆる形態に於いて消失して了ふのは確であるが、此の社會は人間となつた神であり、約言すれば、まがふかたなく、吾々が歴史的発展の內的辨證法に従つて期待せねばならないところのヘーゲルの國家に對する正反對である。

この謂はゞ反對命題的類似は、加之、決して單に實質的なるものではない。それは歴史的基礎を有してゐる。吾々は既に右に、マルクスが、その著「經濟學批判」の序言に於いて、彼のヘーゲル法律哲學の批判的檢閲の結果に就いて爲したる報告を引用せねばならなかつた。吾々は今かの引用文を、その序言を以て補はう。

かの批判は、「彼が、フランスの社會主義及び共產主義を未だ詳しくは知らなかつた時に、彼を煩はしたる疑惑を解く爲めになされた、最初の勞作」であつた。かの引用文そのものは、此處では、反對命題的類似の基礎を爲すのはヘーゲルの國家と市民社會との關係の決定に對する歴史的に條件づけられたる批判的反應であると云ふことに對して證明を提供してゐる。即ちヘーゲルが國家と市民社會との間に確定したる論理的依存關係は、かの當時その正反對にと變つたのである。

(六) 約論

要之。こゝに單獨に討論すべき筈であるマルクス及びエンゲルスの唯物論的歴史觀は、その歴史的諸條件に據れば、ヘーゲル學派の分裂の一所産であり、この分裂は、D. D. シュトラウスのヤン傳に端を發し、フオイエルバツハの「キリスト教の本質」、及びシュトラウスの「キリスト教教義」に關する著作によつて宗教哲學の領域に對して保證せらるゝに至つたのである。マルクス及びエンゲルスの唯物論的歴史觀は、このヘーゲル哲學の舊キリスト教的に宗教的なる實質の分裂をヘーゲルの國家||法律||及び社會學說のこれに劣らず過激にして且これと同様に辨證法的に反對命題的なる一學說によつて補充する。かの最初の分裂に對する動

唯物論的歴史觀の哲學的諸前提

機は明白であると同様に有名である。此の第二の分裂に對する緒をなし、さうして基礎をなす動因は、第一の分裂、殊にフオイエルバツハの哲學の中に、即ち、その宗教哲學的存立の中に存在し、その形而上學的諸前提、即ち、フオイエルバツハの哲學がヘーゲルの學說と共通にもつてゐる模寫說竝にフオイエルバツハ哲學がヘーゲルの唯心論に對して對置するところの唯物論の中に存在し、最後に、フオイエルバツハが、ヘーゲルの論理的に基礎づけられたる合理論に出發して向つて行くところの、人類學的に、後に及んでまた生理學的にも基礎づけられたる感覺論的經驗論の中に存在してゐる。此等の一般的動機は、本來から言へば決定的なる特殊的諸條件と組み合はされてゐる、即ち、其の時代の經濟的及び政治的情態、竝に、十八世紀の末葉以來啓蒙哲學の唯物論的にして且經驗論的なる諸理論と結び付けられて、フランス及びイギリスに於いて、完成せられてゐたところの社會主義的及び共產主

義的諸學說と組み合はされてゐる。其が爲に、かの哲學的基礎の上に立つ新しき歴史觀は經濟的なるものとなるのである。唯物論的前提は、同様に反應を呈しながらドイツに侵入せる機械的自然觀及びこの自然觀から見れば明白なる唯物論的歸結に影響せられて、固定せしめられ、純化せられ、特殊化され、さうして擴大せられる。哲學的諸前提の自立的證明或は單に哲學的諸前提の深化的補成發展すら試みられてはゐないし、經濟的假定の一般的、哲學的諸前提との內的結合さへも試みられてゐない。法律及び國家の影響を有する歴史哲學に對する萌芽は、諸新經濟學說の直接の歸結の中に於いて單に漸く現れたのみであり、歴史の機械的に因果的なる法則性が強く主張せられてはゐるが、然しながら、組織的に説かれてはゐない。經濟的關係の精神的反映として、經濟關係の基礎づけには役立ち得るに至らないところの諸倫理學說に對してもまた、吾々は單に、未説の明白なる傾向を有するに過ぎない。

單に歴史的科學の一分岐としてののみ、意義を有するところの消え失せようとしてゐる宗教的迷信に關する學說は別段特には展開されてゐない。哲學は唯物論的歴史觀にとつては論理及び辨證法に還元する。だが、唯物論的歴史觀にとつては、新しき、經驗論的に歸納的な基礎にも拘らず、ヘーゲルの方法論の思想行程は、唯物論的新解釋において、依然として保持せられてゐる。殆んど時を同じうして、スチユアート・ミルが經驗論的基礎の上に展開してゐた様な歸納的方法の理論に對する萌芽は全然缺けてゐる。

唯物論的歴史觀は斯くて何よりも先づ第一に、その大體に於いて吟味せられざる哲學的諸前提において、ヘーゲル學派の一分裂所産である、然しながら、唯物論的歴史觀が此等の哲學的前提において分裂所産である理由は、唯物論的歴史觀がヘーゲルの思想圏内から無批判に取り出したところのものゝ爲であるのみならず、尙又、唯物論的歴史觀が新しき哲學的着眼點に就

いて示したところのもの、竝に唯物論的歴史觀をしてこの新しきものを採用せしめたる反動的的精神「運動」の爲である。唯物論的歴史觀はその經濟的存立に於いても亦、即ち方法的には立論の辨證法的形式に於いて、實質的には國家と市民社會との關係の轉倒竝に未來の社會の形式的限定に於いて依然として斯る分裂所産であり、この分裂所産であるといふその程度は哲學的前提に於ける場合に比すればより低いけれども、さればとてそれは勿論無意義であるといふ譯ではない。エンゲルスはこのことを、彼が總括して「ドイツ勞働者運動は、ドイツ古典哲學の繼承者である」と説いてゐる以上、彼の流儀で言ひ表してゐるのである。

然りと雖も、唯物論的歴史觀は、フオイエルバツハの宗教哲學や、かの當時における自然研究の獨斷論的生理學的唯物論の如くに、單に一分裂所産であるのみではない。

唯物論的歴史觀は、その經濟的存立に於いては、前

唯物論的歴史觀の哲學的諸前提

世紀の四十年代及び五十年代に於ける、ドイツの精神的發展の所産であり、この所産は今擧げたところの兩學說に比すれば比較にならぬ程重要なものである。

吾々は、今日既に、唯物論的歴史觀は斯の時代の經濟的及び歴史的研究の領域内に於ける、最も重要な現象を展開してゐると云ふも過言ではない。唯物論的歴史觀が、有らゆる極端さや偏頗さの他に示すところの、生産的眞理内容は、遅々としてではあるが、自己を貫徹した。此の眞理内容は夙に、しかも益々進歩的な割合で、經濟的及び歴史的研究の冒すべからざる原動力となつてゐる。此の意味に於いて、マルクスの「近世社會の經濟的運動法則を暴露する」と云ふ大規模な企ては、一の Standard work となつた、而して將來も依然として斯るものであるであらう。經濟的歴史觀は、十八世紀が準備し且此れに次ぐ時代が創り出してゐたところの經濟的發展を會得しようとする、最初の基本的企圖であつた。歴史的發展の經濟的諸條件はこの所

行の後、此等の經濟的條件が其當時まで大部分占めてゐたところの、歴史的研究の背景の中に更に退く事は斷じて不可能である。さうして當分の間必ず、何如なる經濟學說と雖も、マルクス主義を眞面目に研究することなくしては成立し得ない。甚だしい偏頗性として、而して其故に缺點として上記の如く吾々に向つて歩み寄つた此の歴史觀の經濟的特質は、斯くて長所の短所となる。

經濟的歴史觀は、斯くして、歴史的文化條件の未だ充分に評價されてはゐない一つの領域、即ち、當時の人々の打ち驚く眼前で、殆んど豫測せられなかつたところの意義を有すに至るまで發展した經濟的關係を、歴史研究の課題の中に排列し、さうして其の歴史研究の意義に於いて認識せしむ可き使命をもつてゐた。當時の問題の趨勢及び此の問題の趨勢に對するマルクスの態度の中には、既に、新しき經濟學的思想を、科學的自然解釋の結果として現れたる、同時代の哲學的諸

學說と組合はせ、一の總體となさんとする動因が存在してゐた。此の組合はせが、內的なるもの、組織的なものとはならなかつたといふ事は、また同様に長所の短所である。精神的勞働の精力は、マルクスに於いても、又エンゲルスに於いても、經濟的問題の哲學的前提には注がれずして、そは、此の問題そのものに注がれた。マルクスをして特にかの組合はせを行はせたのは、哲學的に波瀾に富める時代より生れたる、豐富なる、穿孔力を以て深所に肉迫する思想勞働の所行である。一の「獨立せる一體をなす世界觀」は、經濟的歴史觀の中に表れてはゐる、然しながら、吾々が歴史的に正當であらうと欲する以上、吾々は唯物論的歴史觀が一の「哲學的體系」であると云ふ事を許されない。斯く云ひ得るが爲めには、かくの如き學說をわが偉大なる諸哲學者中の何人の場合に於いても、現實に關せる科學的全解釋の組織的總計となしたところのものゝ殆んど總てが缺けてゐる。

哲學的に殆んど何等の基礎をも有してはゐないのは、マルクス及びエンゲルスの見解に従つて言へば、彼等の經濟學說の基本をなすところのもの、竝に、此の學說を築きあげるに當つて此れを嚮導したところの方法の要素、即ち唯物論的形而上學及び辨證的方法である。此の兩點から見れば、彼等は補習者ではなくして、唯だ時の子である。然しながら、勿論、エンゲルス（及びマルクス）にも影響を與へないではゐなかつたところの、シエリング及びヘーゲルの觀念論的自然哲學の迷を注視する者は、四十年代の唯物論は、それが一切の餘效と共に今日に至るまで自己の仕事をしてゐた事を知る。此の唯物論が齎した燈火は今や將に消えんとしてゐる、それは益々増して行く哲學的「運動」の爲めに全然蹂躪されるであらう。さうして此れに次いで、ヘーゲルの辨證法的方法は種々なる不合理を示してゐるには相違ないが、それにも拘らず、その中の深い思想内容に隠れてゐるところのものを、吾々が新

たに且、囚はれることなく評價し得る時が來たのである。

マルクス及びエンゲルスは、彼等の哲學的及び經濟的假定の中に於いて、彼等の時代に至るまで經過して來た總ての科學的發展、特に自然科學的及び經濟的發展の總決算のみをなすことを非常に確然と確信してゐたにも拘らず、彼等の哲學的假定をも亦彼等の經濟的假定をも、彼等の議論に最後の決定を與ふるものとして、顧みなかつた。かくの如きガリ／＼の獨斷論は既に彼等のヘーゲルに對する反對が之を妨げる筈である。彼等は自ら、「總てを包括する、絶対に獨立せる、自然及び歴史の認識に關する體系は、辨證法的思索の基本法則と矛盾する」と云ふ事を述べた事がある。歴史は彼是れする中に、唯物論的歴史觀の本來の存在にとつても亦、法廷となつてしまつた。何故ならば、此の學說は、既に一の歴史を有してゐるが故であ

る。マルクスもエンゲルスも、其後に至つて、「共產主義的」歴史學說の本來の主張の幾多を、幾度も繰り返して説明するうちに、半ば制限し、半ば改造した。更に、「同僚」の間に於いては、「修正主義者」が即ち、最近六十年間の科學的展開の進歩、及宣言書の共產主義が殆ど期待しなかつた經濟的展開の經過を斟酌せんと試みる、その人々である、と云ふことを是認することすら妨げるものは、社會民主黨の陣營の内部においては單に政黨關係の正統主義者のみである。専門家として此等の新人の論說を讀む者は、此等新人中理論的に尙一層重要な人々は、單に一部分だけはなほ模寫説論者ではあるが、最早全然唯物論者でもなければ、悉く經驗論者ですらもないといふことを知つてゐる。哲學的視界は彼等にとつても亦、異なるものとなつてしまつた。彼等が自分等を唯物論者と呼ぶことは、假令彼等はそれを以て單に歴史的發展の普遍的に法則的なる因果關聯の思想のみを代表してゐるのであるとし

ても、此處には何等の影響をも及さない。此の言葉は、正さしく事實上、彼等にとつては、その本來の、特に意味せられたる内容を失つてしまつたのである。彼等は、それにも拘らず、彼等の繼承物の本來の土臺の上に立つてゐると信じてゐると云ふ、そのことも亦さしたる影響を及すものではない。こゝに於いてもまた、或學說の内部に或發展が生じた場合に、從來常に起り且又將來絶えず起るであらうが如き經過をとつてゐる。即、人々は新しい思想を、古い思想の中に讀み込むでおき乍ら、此の新しい思想は、古い思想の中に含まれてゐると信じてゐるのである。原學說の歴史的新展開の此等の要素よりも尙重要なのは、此の學說が歴史的及び經濟的研究全般の一つの本質的動力となつて以來、此の學說に施されるところの改造である。此處では、然しながら吾々は未だその端緒を前にしてゐる。